岩井克人著『貨幣論』における『資本論』第１章「商品」の誤読

丹　野　　正

はじめに

岩井克人は1993年出版の『貨幣論』（筑摩書房）のなかで、マルクスの『資本論』のとくに第１章「商品」から頻繁に引用しながら、そしてそれらについて逐一彼の解釈と批判を加えながら、彼自身の貨幣論を展開している。私が本稿で検討したいのは、彼が本書で述べている貨幣の理論ではない。それ以前の彼による『資本論』第１章の理解、マルクスの分析と叙述への解釈についてである。

たとえば、彼は次のように断定する――「マルクスにとって、（商品の）価値を形成する抽象的人間労働とは、ありとあらゆる人間社会に共通する『超』歴史的な実体以外のなにものでもないのである。……。価値の『実体』が超歴史的なものだとしたら、歴史とともに変化しうるのは、それが現実に表現されるその『形態』だけであるというのである」(岩井、17ページ)。

彼はマルクスの商品価値論をこのように理解（誤解）したうえで、「マルクスの資本主義社会にかんする科学（資本論）の目的とは、超歴史的な価値の『実体』がまさにどのようにして商品の交換価値という特殊歴史的な『形態』として表現されるかをしめすことにあることになる」(同上、19ページ）という。そして、彼は続けて『資本論』初版の第１章第１節にあった次の文章を引用して、以下の結論を引き出す。

> われわれは今では価値の実体を知っている。それは労働である。われわれは価値の大きさの尺度を知っている。それは労働時間である。価値の形態、これが価値に交換=価値という刻印を押すのであるが、この形態を分析するのは、まだこれからのことである。　　(初版、六)

ここに、マルクスにおいて、「価値形態論」が必然化されることになったのである。

(岩井、19ページ)

岩井は『貨幣論』のとくに第１章で、随所にマルクスの文章を引用しながら、それらについての岩井の読解と解釈を示している。しかし彼の見解は、それぞれの引用文自体からは引き出すことのできない見解であり、明らかに誤読している。彼は既存の先入観にもとづいてマルクスの個々の文章を解釈しているようなのである。それがどのような先入観かはともあれ、彼はどこをどのように

誤読しているか、他方でマルクスからの引用文は、その前後の文脈と論理の中で何を語っているのかを、以下で確かめてみたい。彼の誤読と誤解のしかたは、たんに彼個人だけのものではなく、何人もの人たちに共通し、彼らが共有するものであろうと考えるからである。

『資本論』初版からの引用文について

最初に、岩井（だけでなく何人も）が引用している上掲の初版の文章について検討する。この文章は、第２版の該当するところにはない。マルクス自身が削除したのである。周知のように、彼は初版では第１章の第１節「商品」とその「付録」という二重の記述になったものを、第２版では合体させて全面的に書き改め、新たな第１章「商品」とした。そのために初版での当該箇所に至るまでの叙述と、第２版でそこに該当する直前の文章に至るまでの叙述は大きく変化した。このことについては後述する。初版では、この文章以前の叙述とそれ以後の叙述を区切り、かつ両者を関連づけるための文章として、これが必要だったのである。上掲の岩井の引用では削られている末尾の一文「しかし、まずその前に、すでに見いだされた諸規定をもう少し展開しなければならない」は、このことを示す一文である（後述）。しかし第２版では、彼は二重の記述を合体させただけでなく、叙述スタイルそのものを変えたのである。そのために、のちに詳述するが、初版では必要だったこの文章は、第２版ではまったく不要のものとなったので削除したのである。

ところが、ドイツ語版マルクス・エンゲルス全集中の『資本論』（これは第２版に基づく第４版がもとになっている）では、その第１章「商品」の該当する箇所に、編集者がわざわざ「初版ではこれに次の句が続いている。」と注記してこの文章を注で復活させたのである（55：以下では『資本論』からの引用は岩井と同様に岡崎次郎訳を用い、彼にならって引用ページ番号のみをしかもドイツ語版のページ番号で示す）。

ドイツ語版全集の編集者はなぜ、マルクスが削除した文章を注で復活させたのか？　彼は理由をなにも述べていないが、初版のここまでの叙述の大部分が第２版でも組み入れられているのに、マルクスがなぜこの文章を第２版で削ったのか、その理由が理解できなかったのであろう。だからわざわざ注記したのである。それでドイツ語版のみならず日本語その他の訳の読者もこれを目にすることとなり、多くの人がこの文章を引用するに至ったのである。

『資本論』初版の第１章第１節「商品」と「第１節への付録」を、同じく岡崎次郎が訳している（『資本論第一巻初版』、国民文庫39、大月書店、1976年）。その第1節では、冒頭から例の文章まで（この訳本では10ページ分）の叙述のしかたは、一見したところでは〈商品とはいかなるものか〉を、マルクス自身が考察し分析しながら書き進めているように見える。しかしよく読むと、彼自身はことわっていないが、これまでの経済学者たちの商品についての考察を整理しながら追跡してみると、経済学の論理としては〈商品とはかくかくしかじかのものである。したがって……であり、……ということになる〉という書き方で一貫している。彼自身が彼らの考え方を整理すればこういうことになる、という書き方である。それに対するマルクス自身の批判と分析は、個々の部分ではほとんど加えていない。このようにして該当箇所まで書き進めている。

初版の冒頭数ページのこうした叙述スタイルに気づかないと、これらはすべてマルクス自身の分析にもとづいた彼自身の論理展開だと誤解することになる。しかもそのうえ何のことわりもなく、例の「われわれは今では価値の実体を知っている。それは……」という文章が続くのだから、これはここまでの部分についてのマルクス自身の結論だと読んでしまう。だがそうではない。〈経済学者たちが明言しあるいはあいまいに表現している見解を整理して、経済学の論理をたどってみれば以上のようになる〉；〈ここまでで、今やわれわれは彼らのいう価値の実体を知ったし、価値の大きさの尺度を知ったわけだ〉、というのである。そして、〈そこで次には価値の形態の分析に進むことになるわけだが〉、「しかし、まずその前に、すでに見いだされた諸規定をもう少し詳しく展開しなければならない」と注記する。つまり、彼らのこれからさきの論理をたどるまえに、ここまでの彼らの考え方を突き詰めて批判的に検討すると、彼らが気づいていないようないかなる論理的帰結に至るか、奇妙なことになるか、を「もう少し詳しく展開しなければならない」というのである。以上のことを明確に示しているのが、例の文章の後二つ目のパラグラフである。

> はじめから商品はわれわれにたいして二面的なものとして、使用価値および交換価値として、現われた。さらに詳しく考察すれば、商品のなかに含まれている労働もまた二面的である、ということが明らかになるであろう。この点は、私によってはじめて批判的に説明された（前著『経済学批判』で、丹野注）のであって、経済学の理解がそれをめぐっている跳躍点である。
>
> (岡崎訳、上掲書、29-30ページ、下線は丹野による)

下線部分のように、ここ（初版）では未来形で書かれている。つまり、〈すでに見いだされた諸規定を批判的に展開し検討するのはこれからであり、以下に続く考察によって、彼らが考え及ばなかったことが明らかになるであろう〉、というわけである。

では、第２版では初版のここまでに相当する部分は、どう書き改められているか？　基本的には初版の文章を引き継ぎながらも、各部分ごとにマルクスの批判的検討が加えられ、挿入されている。これが初版の叙述スタイルおよび内容との大きな違いである。だから、第２版の該当箇所で「われわれは今では……知っている」以下のあの文章をくりかえす必要性そのものがなくなったので、彼は削除したのである。そして第２版では、上掲の初版の文章に相当する部分（「第二節商品に表わされる労働の二重性」の冒頭部分）は、以下のように書き改められている。

> 最初から商品はわれわれにたいして二面的なものとして、使用価値および交換価値として、現われた。次には、労働も、それが価値に表わされているかぎりでは、もはや、使用価値の生みの母としてのそれに属するような特徴をもってはいないということが示された。このような、商品に含まれている労働の二面的な性質は、私がはじめて（『経済学批判』で、丹野注）批判的に指摘したものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない。　(56、下線は丹野による)

下線部分から分かるように、初版とは違い、第２版ではここまでに「労働も……ということ」を既に示しているのである。そして、〈この点は、経済学の論理がいかなるものであるかを見極めるための決定的な跳躍点なのだから、さらに詳しく説明しよう〉、というのである。

以上のようなことに、全集の編集者はおそらく気づかなかったのであろうし、だから彼は初版の例の文章を親切にも注として復活させたのであろう。しかし、それによって、わざわざ誤解の種を挿入してしまったのだ。そのために、第２版のここまでの部分の文章すべては、マルクス自身の分析と考察を叙述したものだと誤解されるに至ったのである。岩井もまたこの陥穽にみごとにはまっている。

「第１節　商品の二つの要因　使用価値と価値」

スミスやリカードらによる経済学は、商品とは「使用価値」であると同時に「交換価値」または「価値」でもあるとすでに規定していた。労働の産物で交換に付され交換の対象となる物、それが商品である。ｘ量の商品Ａ（例えば20エレのリンネル）の所持者とｙ量の商品Ｂ（例えば１着の上着）の所持者が互いの物を交換するのは、両者が自分の商品と相手の商品を同じであり等しいと判断すればこそである。ではなにが同じであり等しいのか。いずれも労働の産物であり、双方の商品の量がある割合のとき、そのいずれにも同じ量の労働が含まれているからである。商品生産者には熟練者もいれば不慣れで時間のかかる者もいる。また、同じ商品を一方は従来の道具を使って生産し、他方はより巧妙な道具や機械を使用して短時間で生産するといった違いもある。いずれにしても、同じ種類の商品の交換価値の実体とその大きさ、つまり商品の価値は、当の社会の人びとがそれを生産するのに要する平均的な労働の量、つまり「社会的に必要な労働の量」によって決まる。このようなものとしての労働が価値の実体である。

ここまでは、スミスやリカードらがすでに行っていた「商品の分析」である。肝心なのは、以上のような分析に対するマルクスの批判であり、分析の視点の転換なのである。経済学は、人間の労働の産物が商品となる社会、あるいは交換を目的としてそれぞれの人がある品物を生産するような社会を、はるか過去の時代にまでさかのぼらせ、狩猟採集時代の祖先たちも互いの獲得物を交換し合っていたと想定している。貨幣の起源は時代が下るとしても、物々交換は太古の時代から行われていたと想定する。それに対しマルクスは、労働生産物が交換されるようになり商品となったのは、人類史のうえではずっと後の時代になってからのことだと批判する。19世紀なかばの現在でも、人びとが手分けして生産した有用物（諸使用価値）が、交換を経ずに人びとの間で分かち合われ、やりとりされる共同体や社会が存在するではないかと指摘する。

だから、労働の産物はいつの時代のどの社会にあっても使用価値ではあるが、交換を行わない社会においてはそれらは商品ではないし、交換価値をもたない。諸使用価値が価値でもある、またはマルクスの表現では「価値の担い手」でもあるという社会は、人びとが生産物を交換し合う社会に限られるのである。「使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわりなく、富の素材的な内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態にあっては、それは同時に素材的

な担い手になっている――交換価値の」(50) という文章は、以上のことを意味している。

次に、どの社会であれ、もろもろの有用物である使用価値は、それぞれに対応した種々の有用労働の産物である。それら使用価値が価値の担い手ともなる社会では、商品の価値の実体は経済学が上記のように規定した労働であり、その大きさ（価値量）は労働の量で計られる。いわゆる「投下労働価値説」である。商品交換社会では、人間の同じ労働が使用価値を生産すると同時にそれの価値をも生産することになる。交換の両当事者は、互いの商品が相異なる使用価値であるからこそ交換する。しかも、相異なる使用価値ではあるが、同時に双方の商品はある適切な量的割合のもとでは上記のような意味で価値が等しいからこそ交換される。つまり交換にあたっては双方の使用価値の違いは捨象されるのである。

> そこで商品体の使用価値を問題にしないことにすれば、商品体に残るものはただ労働生産物という属性だけである。しかし、この労働生産物も、われわれの気がつかないうちにすでに変えられている。労働生産物の使用価値を捨象するならば、それを使用価値にしている物体的な諸成分や諸形態をも捨象することになる。それはもはや机や家や糸やその他の有用物ではない。労働生産物の感覚的性状はすべて消し去られている。それはまた、もはや指物労働や建築労働や紡績労働やその他一定の生産的労働の生産物ではない。労働生産物の有用性といっしょに、労働生産物に表わされている労働の有用性は消え去り、したがってまたこれらの労働のいろいろな具体的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてことごとく同じ人間労働に、抽象的人間労働に、還元されているのである。
>
> そこで今度はこれらの労働生産物に残っているものを考察してみよう。それらに残っているものは、同じまぼろしのような対象性のほかにはなにもなく、無差別的な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物のほかにはなにもない。これらの物が表わしているのは、ただ、その生産に人間労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値――商品価値なのである。 (52)

経済学者が〈商品は使用価値であると同時に価値でもある〉というその「価値」とは、「このようなそれらに共通な社会的実体の結晶」を指しているのですよ、とマルクスは指摘したのである。「共通な社会的実体」が諸商品のなかに結晶化して含まれており、それが価値なのだということになるが、しかしそれは、われわれが個別の商品を手に取っても目で見ることができず、五感でもって確認することができないものである。つまり、現物としての諸商品に備わっている物理・化学的その他の自然の属性ではなく、超自然的な属性である。物体が超自然的な属性をもつことはありえない。だからそれは物体の外から担わされた属性である。担わせているのは、それら使用価値を商品として交換し合っている社会の人びとである。だからこそそれは「社会的実体」なのである。つまり、この社会の人びとがとりかわす特異な社会的関係が、物と物とがとりかわす関係という姿をとって現象するのである。

「第２節　商品に表わされる労働の二重性」

マルクスは第１章の第１節から経済学者の商品分析を上述のように批判しており、それは第２節でも続く。

> 最初から商品はわれわれに対して二面的なものとして、使用価値および交換価値として現われた。次には、労働も、それが価値に表わされている限りでは、もはや、使用価値の生みの親としてのそれに属する特徴をもってはいないことが示された。このような、商品に含まれている労働の二面的な性質は、私がはじめて（前著『経済学批判』で：丹野注）批判的に指摘したものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない。(56)

「商品に含まれている労働の二面的な性質」については、マルクスはすでに第１節でとりあげていた。しかもそれは「私（マルクス）がはじめて批判的に指摘したことであ」り、それまでの経済学者たちが気づかずに見逃してきたことである。これを意識的に区別してとりあつかうことなしに経済学は形成された。そうした経済学では、商品やその価値の分析、および価値の姿かたちの分析等々はいかなることになっているか。逆に、明確に区別してとりあつかうことによって、これらの分析はいかに異なってくるか。このような意味で、「この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない」、と彼はいうのである。

第２節の前半は「有用労働」についての考察である。「その有用性がその生産物の使用価値に、またはその生産物が使用価値であるということに表わされる労働を、われわれは簡単に有用労働と呼ぶ。この観点のもとでは、労働はつねにその有用効果に関連して考察される」(56)。労働の産物が商品となり交換される社会では、当事者たちは互いに異なる種類の商品を交換するのだから、互いに異なる種類の有用労働を行う。だから、「社会的分業は商品生産の存在条件である。といっても、商品生産が社会的分業の存在条件であるのではない。古代インドの（インド古来の、丹野注）共同体では、労働は社会的に分割されているが、生産物が商品になることはない。あるいはまた、もっと手近な例をとってみれば、どの工場でも労働は体系的に分割されているが、この分割は、労働者たちが彼らの個別的生産物を交換することによって媒介されてはいない」(56-57)。共同体の人びとは全体として必要な種々の物品とそれぞれの量を生産するために、相互に意識的に労働の分業を行うのであって、各自がその生産物を自分のものとするために働くのではない。だからそれらが商品になることはない。工場内の分業も管理者の計画と指揮に従って行われる点が異なるが、共同体における分業と同様である。最終生産物が工場から出ていくとき、それは商品になる。だから、「ただ、独立に行われていて互いに依存し合っていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相対するのである」(57)。

第２節の後半は、商品に表わされる労働の二重性のもう一方の性質についてである。商品の使用価値の違いを捨象すれば、それぞれが使用価値となって表われる有用労働の違いも捨象される。商

品の「価値」を形成する労働とは、無差別で抽象的な、いわば無色透明な労働であり、そうしたまぼろしまたは幽霊のような実体が、どれだけの量凝固しているかだけが問題なのである。「つまり、商品に含まれている労働は、使用価値との関連ではただ質的にのみ認められるとすれば、価値量との関係では、もはやそれ以外には質を持たない人間労働に還元されていて、ただ量的にのみ認められるのである」(60)。

〈古典派経済学の一時代を画する科学的発見〉について

岩井は既述のような理由で、マルクスは商品の交換価値、価値およびその実体についての古典派経済学の考え方を、彼なりに再規定しながら踏襲したのだと解釈する。彼は『資本論』88ページの文章を以下のように引用し、それに対する彼の読解を提示している。

> 使用対象の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的産物……である。労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしかないという後世の科学的発見は、人類の発展史上に一時代を画するものである……　(88)
>
> マルクスはここで、古典派経済学に「人類の発展史上に一時代を画する発見」をなしとげた「科学」というまさに最大級の評価をあたえている。では、なにを古典派経済学は発見したとマルクスはいっているのだろうか？
>
> それはもちろん、ものの価値とはその生産に社会的に必要となる労働時間によって規定されるという「労働価値」の法則、すなわち「価値法則」である。「労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしかない」という右の引用のなかのいささかまわりくどい表現は、まさにこの法則を指している。マルクスのべつな表現をつかえば、「ある……財貨が価値をもつのは、ただ抽象的人間労働がそれに対象化または物質化されている」からであり、その「価値の大きさは……それに含まれている〈価値を形成する実体〉の量、すなわち労働の量によって……計られる」(53) ということである。
>
> (岩井、14ページ)

しかし、まず、このマルクスからの引用は、その前後の文脈を岩井が無視して意図的にこのようなかたちで抜き書きしたものである。この引用文の直前には「なぜならば」という語があり、原文は「なぜならば、使用対象の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的産物だからである」となっている（傍点は丹野による、岩井が省いた語)。この一文は明らかにその前の叙述内容に対して、「なぜならば……だからである」とその理由を説明したものである。たしかに、言語は人間の社会的産物である。しかも人類の歴史上何万年も前にさかのぼる社会的産物である。しかし、「使用対象の価値としての規定」は、「人間の社会的産物」ではあっても、言語と同じように何万年も歴史をさかのぼるものではない。この前のページでマルクスは次のように述べている。

およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにほかならない。これらの私的諸労働の複合体は社会的総労働をなしている。生産者たちは自分たちの労働生産物の交換をつうじてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の独自な社会的性格もまたこの交換においてはじめて現われるのである。……すなわち、諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係および諸物の社会的な関係として、現われるのである。(87)

以上の文章、および引用は省略するがこれに続く文章は、第４節「商品の呪物的性格とその秘密」における文章である。第１章の第１節から第３節までとくに第２節「商品に表わされる労働の二重性」で展開した分析と考察を要約して提示した部分である。そして、上記の「なぜならば、……だからである」の直前には、次のように述べられている。

だから、人間が彼らの労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらの物が彼らにとっては一様な人間労働の単に物的な外皮として認められるからではない。逆である。彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等置することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等置するのである。彼らはそれを知ってはいないが、しかし、それを行なうのである。それゆえ、価値の額（ひたい）に価値とはなんであるかが書いてあるのではない。価値は、むしろ、それぞれの労働生産物を一つの社会的な象形文字にするのである。あとになって、人間は象形文字の意味を解いて彼ら自身の社会的な産物の秘密を探りだそうとする。(88)

冒頭の「人間」つまり「彼らの労働生産物を互いに価値として関係させる」人びとは、すでに見たように、歴史上のすべての社会の人間ではない。「使用対象の価値としての規定」は、商品交換社会の人間の「社会的産物」なのである。しかも、「彼らはそれを知っていないが、しかし、それを行なうのであ」り、行ってきたのである。彼らはそれぞれの労働生産物を交換し合うことをつうじて、それらを同一等質のものに還元し、それを価値と呼び、「一つの社会的な象形文字に」してきた。「交換がすでに十分な広がりと重要さをもつようになり、したがって有用な諸物が交換のために生産され、したがって諸物の価値性格がすでにそれらの生産そのものにさいして考慮されるようになった」(87) 近代社会に至って、人びと（なかでも経済学者）はこの「象形文字の意味を解いて彼ら自身の社会的な産物の秘密を探りだそうと」した。そしてついに、「労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしかない」という経済学の発見に至ったのである。以上のような歴史的意味を込めて、マルクスはこの発見を「人類の発展史上に一時代を画するもの」だと認めたのである。「ではあるが、」と彼は続ける。

上の岩井による引用の最後は「一時代を画するものである……」となっているが、原文は次のようになっている。

……一時代を画するものではあるが、しかしそれはけっして労働の社会的性格の対象的外観を追い払うものではない。この特殊な生産形態、商品生産だけにあてはまること、すなわち、互いに独立な私的な諸労働の独自な社会的性格はそれらの労働の人間労働としての同等性にあるのであってこの社会的性格が労働生産物の価値性格の形態をとるのだということが、商品生産の諸関係のなかにとらわれている人々にとっては、かの発見の前にもあとにも、最終的なものに見えるのであって、……　(88)、(傍点は丹野)

岩井が無視した「……ではあるが、」以下の文章を見れば、上掲の彼の解釈は、彼が恣意的に切りとった文章に対してほどこした、マルクスが古典派経済学の「発見」を高く評価したということのみを強調したものであることがわかる。なぜこのように誤解したかといえば、第１に彼が前節で述べたような〈陥穽〉にすっかりはまってしまっているからである。そして第２に、彼は「なぜならば、……だからである」という一文を、その前の文章からの文脈を無視することによって、マルクスが〈使用対象の価値としての規定は、言語と同じように人間の社会的産物である〉と断言しているとあえて解釈したのである。言語は人間に固有のものであり、いつの時代のどの社会も有してきたものである。その〈言語と同じように使用対象の価値としての規定も人間の社会的産物だ〉とマルクスが言っている；つまりそれは〈言語と同じように超歴史的な社会的産物だ〉と言っている；と彼は誤解したのである。そう理解したかったがために、「……ではあるが、」以下の文章、とくに、それは「この特殊な生産形態、商品生産だけにあてはまること」なのだとマルクスが古典派経済学の誤りを指摘した文章を、あえて無視したのだ。ちなみに、マルクスが「……ということが、商品生産の諸関係のなかにとらわれている人々にとっては、かの発見の前にもあとにも、最終的なものに見えるのであ」るというのは、古典派経済学者も含めた経済学者たちを指している。

岩井は、マルクスが古典派経済学の「発見」を踏襲してそれを定式化した（だけな）のだと考える。このような判断は、彼だけに限らず多くの経済学者にも共通の考え方なのであろう。彼は続けて次のように言う。「ところで、現代においては、たとえ超保守的なマルクス経済学者の間でも、『労働価値論』をこのようにマルクスが定式化したままのかたちで主張する人物をさがしだすのは困難だろう。『価値を形成する実体』としての『抽象的人間労働』とか、それの財貨への『対象化』や『物質化』について語るその実体論的な語り口が、あまりにも古色蒼然としているからである」(同上、14-15ページ)。これは岩井の誤解にもとづくものであることは上述した。

さらに、さきに岩井が引用したマルクスの文章の中にも、彼が単にかの「発見」を踏襲したのではないことが明示されている。それは、「労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、……」(傍点は丹野）というただし書きである。だが、岩井はこれがただし書きだとはまったく気づいていない。「それが価値であるかぎりでは」というのは、〈労働生産物が商品であるかぎりでは〉ということであり、〈それが交換されるかぎりでは〉、または〈交換を目的としてもろもろの品物が生産される社会にあっては〉ということである。そしてその典型が当時における現代西欧社会なのであり、だからこそこの社会の人びとは、労働生産物は使用価値であるのみでなく価値でもあるのだと考える。そして、商品の価値の実体を追求する経済学者たちのなかで、古典派経済学者たちがまが

りなりにもようやく価値の実体とその大きさの尺度を「発見」した。だがしかし、それはこの社会の人びとが労働生産物を交換目的の商品としているそのかぎりでのことなのですよ、とマルクスはいうのである。だから彼は、「……ではあるが」以下の上掲の文章で彼らの勘違いを指摘し批判したのである。

人間はもともと単独生活者ではなく、本来社会的存在であり、共同生活を営んできた。これがマルクスの基本的な考えである。いつの時代のどんな社会でも、人びと全体にとって必要な物は当の人びとが手分けして生産する。つまり社会的分業である。この意味で人間の労働は本来社会的労働である。その労働生産物は当の人びとの間で、交換を介することなしに直接に配分され、共同で利用・消費されていた。このような社会では、労働生産物は具体的なもろもろの有用物つまり使用価値であるだけである。

その対極をなす社会が商品社会である。人びとは互いに独立に私的な労働を営み、各自の私的な労働生産物を他者たちの多くの品物と交換する。つまり各自の私的な生活に必要な品物は交換を通じて入手しなければならない。この社会では労働生産物は商品なのである。x量の商品Xとy量の商品Yを交換しようとする両当事者は、それらが等しいと思えばこそ交換する。等しいということは、姿かたちの異なる二つの商品がじつは同じものであり、その同じものが双方の商品のなかに同じ量だけ存在する、ということである。では諸商品に内在するこの同じものとは何であり、その量はどうやって計ることができるのか？　人びとは、経済学者たちがこの問いの答えを発見するはるか以前から、こともなげに交換を行ってきた。アリストテレス以来のこの難問の解は、古典派経済学者らによってようやく発見された。しかし彼らは、人間の労働が本来もっている社会的性格が、この特殊な生産形態の社会では私的労働の生産物それ自体が社会的性格をそなえているかのような外観をとって現れているのだということには気づいていない。互いに独立に営まれる私的労働という形態をとっていても、にもかかわらずそれらもやはり社会的労働なのであり、その生産物が姿かたちは異なるにもかかわらずじつは同じものであり等しいものとして交換されるという迂回路を通じて、私的労働の独自な社会的性格が姿を現わす。といっても、それはこの社会に独自の姿をとってであって、個別の商品をいくら凝視しても見えず五感で確かめることのできない姿である。それが商品の価値なのである。だから、当の商品は、自分自身ではわれわれに自分自身の価値の姿かたちを現わすことができない。では商品たちは、自らの価値の姿かたちをいかにして目に見える形態をとって現わすか？　それを論じたのがマルクスの「価値形態」論なのである。以上が、上掲の「……ではあるが、」以下の文章の意味である。

クーゲルマンへの手紙の解釈について

岩井はさらに、マルクスの価値論は「超歴史的実体論」であると、マルクスからクーゲルマンへの手紙の中の一節を引用して論じている。それを以下に見てみよう。その手紙は『資本論』初版刊行（1867年）の翌年７月11日づけのもので、当のクーゲルマンは「1867年の春、私（マルクス）が彼のもとを訪れていたとき、最初の校正刷がハンブルグからきた。そして、彼は、大多数の読者に

とっては価値形態の補足的な、もっと教師的な説明が必要だということを、私に納得させた」(18)友人である。そのために初版では第１章第１節「商品」とその「付録」という二重の記述になったのである。岩井が引用している部分は、初版の「商品」論へのある人物の批判に対して、マルクスがこの男の無知さかげんをクーゲルマンに説明している一節である。以下に岩井（15-16ページ）による引用部分をかかげ、それを彼がどのように読み取ったかを検討する。

どの国民も、もし一年とは言わずに数週間でも労働をやめれば、死んでしまうであろう、ということは子供でもわかることです。また、いろいろな欲望量に対応する諸生産物の量が、社会的総労働のいろいろな量的に規定された量を必要とするということも、やはり子供でもわかることです。このような、一定の割合での社会的労働の分割の必要は、けっして社会的生産物の特定の形態によって廃棄されうるものではなくて、ただその現象形態を変えうるだけだ、ということは自明です。自然法則はけっして廃棄されうるものではありません。歴史的に違ういろいろの状態のもとで変化しうるものは、ただ、かの諸法則が貫かれうる形態だけです。そして、社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される社会状態のもとでこのような一定の割合での労働の分割が実現される形態、これがまさにこれらの生産物の交換価値なのである。

科学とは、まさに、どのようにして価値法則が貫かれるか、を説明することなのです。もし外観上法則と矛盾する現象をすべてはじめから「解明」しようとするならば、科学以前に科学を提供しなければならないことになるでしょう。リカードの誤りは、まさに、かれが価値に関するかれの最初の章のなかでこれから展開されるべきあらゆる可能な範疇を与えられたものとして前提して、それらが価値法則に適合していることを論証しようとしている、ということなのです。　(1868年７月11日づけの「クーゲルマンへの手紙」、岡崎次郎訳)

以上の引用に続けて岩井はこれを次のように解説する。

「資本論」刊行の翌年に書かれたこの有名な手紙の中で主張されているのは、まさに徹底的な「労働価値論」なのである。ここでのべられている「価値法則」とは、いろいろな欲望に応じていろいろな労働を抽象的な人間労働として社会的に分配する法則のことである。マルクスは、この「法則」が「子供にもわかる」自明性をもっており、歴史的に存在したどのような人間社会においても成立する「自然法則」にほかならないといっている。……。マルクスにとって、価値を形成する抽象的人間労働とは、ありとあらゆる人間社会に共通する「超」歴史的な実体以外のなにものでもないのである。　(岩井、16-17ページ)

ごらんのように、岩井はマルクスのいう「自然法則」を「価値法則」と同一のものとして見なしている。しかも彼は、「マルクスは、この『法則』(直前の文の「価値法則」を指す：丹野）が、『子供にもわかる』自明性をもっており、歴史に存在したどのような人間社会においても成立する

『自然法則』にほかならないといっている」と、自らの混同をマルクスに押しつけている。彼の次の一文も同様に混同を示している。「『自然法則』としての『価値法則』はけっして『廃棄されうるものではなくて、ただその現象形態を変えうるだけだ』と、右のクーゲルマンへの手紙の中でマルクスはのべている」(同上、17ページ)。マルクスはこの手紙の上掲の部分の前でもあとでも、「価値法則」が「自然法則」にほかならないなどとは一言もしていない。さらに岩井は、「ここでのべられている『価値法則』とは、いろいろな欲望に応じていろいろな労働を抽象的な人間労働として社会的に分配する法則のことである」という(傍点部は丹野)。「いろいろな欲望……」以下の語句は、傍点を付した部分を除けば、マルクスの手紙文のなかの「自然法則」に相当する。それに岩井が傍点の語句を加えると、それは「価値法則」を表わすことになる、というわけである。これが「『子供にもわかる』自明性をもって」いるとは、とても思えない。

上掲の手紙のなかでマルクスが「自然法則」について述べている部分を簡略化すると、次のような構文になる。

［A］ということは子供でもわかることです。また［B］ということも、やはり子供でもわかることです。このような、［C］、ということは自明です。自然法則はけっして廃棄されうるものではありません。

そして、「自然法則」とは明らかにこれら［A］、［B］、［C］を指しており、これらはいつの時代のどんな社会をも貫く法則なのだから，彼はこれらを「自然法則」と呼んだのである。

［A］：「どの国民も、もし一年と言わずに数週間でも労働をやめれば、死んでしまうであろう」

「どの国民も」というのは、いつの時代のどの社会の人びとも、ということである。社会の全員にとって“棚からぼたもち”が続くことはありえないから、確かに子供でもわかることである。

［B］：「いろいろな欲望量に対応する諸生産物の量が社会的総労働のいろいろな量的に規定された量を必要とするということ」

どの社会も、当該社会の人びと総体としてのさまざまな種類の欲望とそのそれぞれの量をもつ。そしてそれらを満たすためにはそれぞれの量の種々の品物を当の社会全体として生産しなければならない。そのためにはなんらかの形での社会的分業が不可欠であり、人びとの総労働（社会的総労働）が各種の品物の必要生産量に応じて割り振られていなければならない。ただし、それらの労働生産物が商品という形態をとるか否かは社会によって異なる。いつの時代のどの社会の子供も、やがては成長してこうした社会的総労働の一端を担うことになる。

［C］：「このような、一定の割合での社会的労働の分割の必要は、けっして社会的生産物の特定の形態によって廃棄されうるものではなくて、ただその現象形態を変えうるだけだ、ということ」(傍点は丹野、『全集』32巻の訳（553）では「社会的生産」となっている)

「このような、一定の割合での社会的労働の分割の必要」という語句を、岩井は上述のように「いろいろな欲望に応じていろいろな労働を抽象的な人間労働として社会的に分配する法則」と恣意的に読み替え、しかもそのうえ、マルクスのいう「価値法則」とはこれのことだといっているが、これは岩井のまったくの誤読・誤解である。「一定の割合での社会的労働の分割の必要」はどの社会をも貫いていることであって、各人が分担する労働が直接の社会的連関のもとに行われるか、そ

れとも個々人の自分本位の私的な労働という現象形態をとって行われるかは、社会状況によって異なる。後者のような社会にあっても、私的な労働の生産物が私的な交換を通じて流通することにより，私的労働が総体として間接的に社会的連関で結ばれるという結果をもたらす。だからこの社会でもこのような現象形態をとりながら、「一定の割合での社会的労働の分割」は貫かれる、というわけである。だからこそマルクスは、「歴史的に違ういろいろな状態のもとで変化しうるのは、ただ、かの諸法則が貫かれる形態だけです」というのである。上掲の手紙文のなかのここまでが「自然法則」についての叙述である。そしてこの部分は以上のように「労働価値論」とはなんの関係もない。

では、この自然法則は、マルクスが『資本論』で考察の対象とした社会ではどのような形態で貫かれるか？　それを要約したのが「そして、……」以下の文章である。この社会では、労働は個々人の私的な労働という形で営まれる。その生産物は相互に私的に交換される、つまり商品となる。この商品交換を通じて，ばらばらに営まれる私的労働の間の社会的労働としての関連が結果的に実現される。というのは、自らの生産物と他者のそれらとの交換が実現しなければ，彼の生産物とそのための彼の労働は社会的に無用なものであったことになるからである。このような社会状態のもとでかの「一定の割合での労働の分割」が実現される形態、「これがまさにこれらの生産物の交換価値なのである」。だからこそマルクスは『資本論』を「商品」の分析から、「商品の交換価値」の分析から書き始めたのである。同書本文の２ページめにある以下の文章が、交換価値、価値、およびその実体等々の分析への入口を示している。

> 使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわりなく、富の素材的な内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態にあっては、それは同時に素材的な担い手になっている――交換価値の。　(50)

次に、上掲のマルクスの手紙文の第２段落に目を移そう。「価値法則」という言葉はこの第２段落の最初の文章にはじめて出てくる。このクーゲルマンへの手紙では、この言葉は上の引用文より前の部分には出てこないし、あとの部分にも「価値法則」とはなにかを規定した文章はない（全集32巻、552-54)。ちなみに、『資本論』第１巻の巻末索引をもとに「価値法則」という言葉が出ているページを調べても、この法則をマルクスが直接に規定した文章はどこにもない。そのためか、ドイツ語版全集の索引作製者は、そこには「価値法則」という言葉が出てこないが、この部分の叙述を指しているのだろうと推測して，54、55、89などのページをあげている。

ともあれ、第２段落のはじめの「科学とは、まさに、どのようにして価値法則が貫かれるか、を説明することなのです」という文章は、この直前の第１段落最後の「そして……」という文章を文脈として受けている。そして、「どのようにして価値法則が貫かれるか」というのは、岩井が誤解したような「超歴史的に貫かれるか」という意味ではまったくない。明らかに、この社会ではこの価値法則はどのように貫徹されていくか、という意味であり、それを「逐一明らかにすることこそ、科学なのです」(同じ文章の『全集』32巻、553での訳）というのである。ここでの「科学」とは、

この社会のなかで成立した経済学、なかでもマルクスが評価する古典派経済学を指す。そして、交換価値の分析からはじめて価値法則がこの社会の諸局面にどんな形でいかに貫徹していくかを逐一解き明かすことこそ、経済学の任務なのだ、それなのに経済学はそれを遂行せずに、逆に自ら解明し展開すべき諸範疇を所与のものと前提して「それらが価値法則に適合していることを論証しようとする」誤りを犯している、だから私（マルクス）が彼らに代ってやったのだ、というのである。

ただしマルクスは、彼らの後継者として経済学という科学を確立しようとしたのではない。それらを逐一解き明かすことによって、経済学がそのなかで生育した、人類社会の歴史上特殊な発展段階にあるこの社会が内包する矛盾が露呈されるのだ、というのである。この意味で、現存の経済学は科学とはいえ、この社会を永遠の母体とするかぎりでの科学にすぎない。それゆえに『資本論』の副題は「経済学批判」なのだ。上述したように、「マルクスにとって、価値を形成する抽象的人間労働とは、ありとあらゆる人間社会に共通する『超』歴史的な実体以外のなにものでもない」(岩井、17ページ）という岩井の断定は、まったくの誤読・誤解である。

「ヴァグナーの著書への傍注」からの引用と解釈について

岩井はさらに、マルクスが1879年から80年にかけて書きしるした「アードルフ・ヴァグナー著『経済学教科書』への傍注」(全集19巻所収）から、以下の一文（375）を引用し、それを奇妙に読解している。

> 商品の〈価値〉は、他のすべての歴史的社会形態にも、別の形態でではあるが同様に存在するもの、すなわち労働の社会的性格――労働が〈社会的〉労働力の支出として存在するかぎりでの――を、ただ歴史的に発展した一形態で表現するだけだ。(傍点は丹野、岩井の引用で抜けている字)
>
> という言葉が明らかにしているように、商品の交換価値は超歴史的な価値の「実体」の特殊歴史的な「形態」であるという立場を、マルクスは晩年まで変わらずもちつづけていたのである。(岩井、18ページ)

まずマルクスの文章を見てみよう。それは次のような構文になっている。

商品の「価値」は、［A］すなわち［B］を、ただ歴史的に発展した一形態で表現するだけだ。

マルクスは、「傍注」ではこの文章に続けて次のように書いている。「このように商品の『価値』があらゆる社会形態に存在するものの特定の歴史的形態にすぎぬとすれば、……」(全集19巻、(375))。これを同様に書き換えると、

商品の「価値」は［C］の特定の歴史的形態にすぎない。

となる。［C］すなわち「あらゆる社会形態に存在するもの」は、上の［A］：「他のすべての歴史的社会形態にも別の形態でではあるが、同様に存在するもの」を簡略化した語句である。つまり、〈あらゆる歴史的社会形態に存在してきたのだが、この社会における形態とは別の形態で存在して

きたもの〉ということである。ではそれはこの社会ではどんな形態で存在するかといえば、商品の「価値」という「特定の歴史的形態」、「歴史的に発展した一形態」で存在する、というわけである。

では、この社会では商品の「価値」という形態で存在し、他のすべての歴史的社会形態にも別の形態でではあるが存在するものとはなにか？　それがすなわち［B］：「労働の社会的性格――労働が『社会的』労働力の支出として存在するかぎりでの――」なのだ。

われわれはすでに、「労働の社会的性格」に関するここでの叙述のし方と同様のマルクスの叙述スタイルを、クーゲルマンへの手紙のなかの「自然法則」について説明している部分で見てきた。歴史上のどんな社会をも貫いて存在するもの、ただしこの社会では他の社会でとは違った形態をとって存在するもの、それが「一定の割合での社会的労働の分割」であった。そしてそれがこの社会で貫徹される形態、それこそがこの社会の生産物――つまり諸商品――の交換価値にほかならないのであった。

つまり、マルクスは、岩井が誤解したような「立場」ではないマルクス本来の「立場」を、その晩年まで変わらずもちつづけていたのである。しかし、と岩井はいうかもしれない。さきの手紙では、「これがまさにこれらの生産物の交換価値なのである」といっていたのに、ここでは「商品の『価値』」といっているではないか；しかも、「じっさい、『交換価値は価値の現象形態にすぎず、〈価値〉ではない』と、」(同じ傍注のなか――同上、(369) ――で)「マルクスははっきりとのべている」(岩井、17-18ページ) ではないか、と。たしかに商品の交換価値は商品の価値そのものではなく、それの現象形態、つまり商品の価値がある姿かたちをとって現れたもの、である。逆にいえば、ある商品の価値とは、当の商品そのものをどんなふうに調べても五感でもって確かめることのできない「まぼろしのような対象性」(52) である。つまり商品の価値とは当の品物自体にそなわっている自然の属性ではなく、超自然的な属性である。だからマルクスは商品とは、使用価値であると同時に価値である、とはいわず、「使用対象であると同時に価値の担い手である」(62) というのである。その超自然的な属性を担わせているのは、この社会の人びとである。けっして歴史上のどの社会の人びともではない。そして、「商品の価値対象性は純粋に社会的であるということを思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにしか現れえないということにもまたおのずから明らかである」(62)、とマルクスはいう。

「商品の価値対象性」とは、商品すなわち交換に供される品物がその現物形態において価値であるということである。ただしその現物形態はある種の使用価値であることを表わしているだけであって、自分自身では価値の目に見える姿かたちを表わすことはできない。それはこの社会の人びとがその物に担わせたものだからである。この意味でそれは「純粋に社会的な」属性なのである。とはいえ、物自体が純粋に社会的な属性をもつわけはないのだから、それは、この社会の人びとが彼らの間の特殊な人間関係のあり方を物に投映したものである。ただし彼らは、それは自分たちが担わせたものだとは気づかず、物自体がもっている属性だと信じ込んでいる。この意味で、それはこの社会の人びとにとって「純粋に社会的」なのであって、歴史上のどの社会の人びとにとっても純粋に社会的なのではない。こうしたことを把握しているならば、価値対象性は個々の商品のうちに現われるわけがなく、「商品と商品との社会的な関係のうちにしか現れえないということもまたおの

ずから明らかである」というのである。そして、商品の価値が商品と商品との社会的関係すなわち交換関係のうちに目に見える姿かたちをとってつまり現象形態として現われるのが、商品の交換価値なのである。ついでにいえば、物と物とは物理・化学的な関係をもつことはあっても、社会的な関係をもつことはない。だからこれは、互いの物を商品として交換しようとするこの社会における人と人との間の特殊な社会的関係である。

マルクスは〈ブルジョア社会にとっての経済的細胞形態である労働生産物の商品形態または商品の価値形態〉（第１版序文）をとことん顕微解剖したうえで、次のように要約している。

> だから、商品形態の秘密はただ単に次のことのうちにあるわけである。すなわち、商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させるということである。このような置き替え［Quidproquo］によって、労働生産物は商品になり、感覚的であると同時に超感覚的である物、または社会的な物になるのである。……。ここで人間にとって諸物の関係という幻影的な形態をとるものは、ただ人間自身の特定の社会的関係でしかないのである。 (86)

> このような、商品世界の呪物的性格は、前の分析がすでに示したように、商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずるものである。 (87)

そして、岩井が「傍注」から引用した上掲の文章、およびその文章がその一部分をなす前後20行ほどの一連の文章（全集19巻、(375-376)）の内容は、再度引用するが『資本論』の以下の一節に対応している。

> およそ使用価値が商品に（つまり価値の担い手に：丹野）なるのは、それらが互いに独立に営まれた私的諸労働の生産物であるからにほかならない。これらの私的諸労働の複合体は社会的総労働をなしている。生産者たちは自分たちの労働生産物の交換をつうじてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の独自な社会的性格もまたこの交換においてはじめて現われるのである。言いかえれば、私的諸労働は、交換によって労働生産物がおかれ労働生産物を介して生産者たちがおかれるところの諸関係によって、はじめて実際に社会的総労働の諸環として実証されるのである。それだから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関係は、そのあるがままのものとして現われるのである。すなわち、諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係および諸物の社会的な関係として、現われるのである。 (87)

「価値形態」：価値の姿かたち

既述のように、商品の価値はその使用価値とは違って目に見えないものである。個別の商品を手に取ってどんなに調べても、物理・化学的な試験や顕微鏡によっても、その価値は姿を現わさない。そうやって確かめられるのは、それが特定の種類の使用価値であり、どれだけ優れたまたは粗雑な使用価値であるかである。また、それがナイフであれば、そのナイフとなって表わされた有用労働が、どれだけ優れたまたは粗雑な労働であるかがわかるだけである。

> 商品は、使用価値または商品体の形態をとって、鉄やリンネルや小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありのままの現物形態である。だが、それらが商品であるのは、ただ、それらが二重なものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからである。それゆえ、商品は、ただそれが二重形態、すなわち現物形態と価値形態とをもつかぎりでのみ、商品として現われるのであり、言いかえれば商品という形態をもつのである。　(62)

労働生産物を商品とはしない社会では、それらは有用な使用対象であり、目で見てわかる使用価値という姿をとっているだけである。しかし、この社会では、それらは使用価値であると同時に価値の担い手でもある。彼らは自らの生産物がこうした二重なものであればこそそれぞれの商品を生産するのである。そうであれば、この社会では、商品は二重の形態（姿かたち）、使用価値という現物形態と同時に、これが「価値」でもありしかも一定の大きさの価値なのだという「価値の形態」をもつはずである。しかも、この社会の人びとは日々現実に商品を交換している。ということには、彼らは日々実際に商品の価値形態を目にしているのである。彼らは自らの商品の〈価値の姿かたち〉を、どのようにして見ているのか。これまでの経済学者はこのことをないがしろにしてきた、とマルクスは批判する。彼は自らこの問題を解明し論証したうえで、第１章第４節の終りに以下のように注記している。

> 古典派経済学の根本欠陥の一つは、商品の、また特に商品価値の分析から、価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけだすことに成功しなかったということである。Ａ．スミスやリカードのような、まさにその最良の代表者においてさえ、古典派経済学は、価値形態を、まったくどうでもよいものとして、また商品そのものの性質には外的なものとして、取り扱っているのである。その原因は、価値量の分析にすっかり注意を奪われてしまったというだけではない。それはもっと深いところにある。……　(95-96の注32)

こうしてマルクスは、最良の経済学者たちでさえないがしろにしてきたこと、まともに分析しえなかった「商品の価値形態」を、第３節で論証し展開して見せるのである。

価値形態が現われる場面

岩井は次のマルクスの文章を引用し、それに続けて以下のようにいう。

> 商品の価値対象性は、どうにもつかまえようのわからないしろものだということによって、マダム・クィックリーとは違っている。商品体の感覚的に粗雑な対象性とは正反対に、商品の価値対象性には一分子も自然素材ははいっていない。それゆえ、ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえようがないのである。とはいえ、諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な単位の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性をもっているのだということ、したがって商品の価値対象性は純粋に社会的であるということを思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにしか現われえないということもまたおのずから明らかである。 (62)

> 『資本論』の「価値形態論」にかんする節のほぼ冒頭におかれたこの文章がいっているのは、商品とは必然的にほかのすべての商品と社会的な関係をもっているということである。すでに労働価値論によって「価値の実体を知っている」マルクスにとっては、「使用価値［モノ］の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的な産物」にほかならないからである。価値とは関係のなかにおいてのみあらわれてくる。商品の世界とは、たんなるモノの寄せ集めではなく、価値のにない手としてのモノとモノとのあいだに成立するさまざまな関係の総体、すなわち「価値体系」にほかならない。 (岩井、24-25ページ)

岩井がいっていることは、マルクスのこの文章とはなんの関係もなさそうである。第１に、「(マルクスの) この文章がいっているのは、商品とは必然的に他のすべての商品と社会的な関係をもっているということである」と彼はいうが、これはマルクスの論旨を意識的にぼやかし、無意味化することでしかない。第２に、その次の文章は岩井の誤読と誤解によるものであることは、すでに指摘したとおりである。しかし、彼にとっては、彼がその意味を誤解したうえでの「使用対象の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的な産物」だというマルクスのこの一言が重要なのである。そうであれば、言語と同じように「価値とは関係のなかにおいてのみあらわれてくる」ことになり、言語と同じように「商品の世界とは、……モノとモノの間に成立するさまざまな関係の総体、すなわち『価値体系』にほかならない」ことになるからである。要するに彼は、柄谷行人の『マルクスその可能性の中心』と同様に、〈商品世界の価値体系の科学〉としての経済学を、〈言葉の世界における価値体系の科学〉としてのソシュール言語学や〈構造主義〉に結びつけようとしたのである。それがここから数ページのテーマであり、「言葉とは価値であり、価値とは関係のなかにおいてのみあらわれてくる」という、「『言語』を『純粋な価値の体系』として規定した」ソシュール言語学にたどりつく (岩井、28ページ)。岩井自身の「貨幣論」の展開にはソシュール言語学や構造主義が必要なのかもしれないが、少くともそれらが彼のマルクス理解に役立っている

形跡は見られない。岩井は上掲のマルクスの文章を、いわば〈さしみのツマ〉として引用しただけである。

マルクスのこの文章は、私が前節のはじめの部分で引用した文章に続くものである。だから、これまでの論旨からすれば、このなかの「諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な単位の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性をもっているのだということ、したがって商品の価値対象性は純粋に社会的であるということ」(傍点は丹野) の意味も明らかであろう。だから、これらのことを「思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにしか現われえないということもまたおのずから明らかである」(同上) とマルクスはいうのである。岩井は省略してしまったが、彼は続けて次のようにいっている。

> われわれも、じっさい、商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている価値を追跡してきたのである。いま、われわれは再び価値のこの現象形態に帰らなければならない。 (62)

商品の価値は、労働生産物を価値たらしめているその実体は、すでにみてきたように、現物としての商品自体に備わっている自然の属性ではなく、超自然的 (すなわち社会的) な属性なのであった。だから、どの商品も自分自身では自分の価値の姿かたちを表現することができない。にもかかわらず、この社会の商品所持者たちは、日々の商品交換の場面で自分の商品の価値形態を実際に目にしている。だからこそ彼らは交換し合うのであって、それを見てとることができなければ、交換を拒否するはずである。また、彼らが「それでは割りに合わない」といって交渉するのも、価値形態とその大小が見えていればこそである。

では、商品所持者たちはどこでどのようにして商品の価値の姿かたちを見出すのか。「価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにしか現われえない」のであって、それはこれまでの分析を「思い出すならば」、「おのずから明らかである」と彼はいう。もちろん、商品という物どうしが社会的関係をとり結ぶわけがない。だから価値対象性は商品の所持者どうしが社会的な関係をとり結ぶ場面、つまり互いの商品の交換という関係のうちにしか現われえないのである。

というわけで、マルクスはこれ以後この交換の場面に立ち入るのだが、もはや近代市民社会では商品と商品との直接の交換はまれであり、商品と貨幣との交換または貨幣による商品の売買、貨幣を媒介とした商品と商品の交換が大部分である。そこでまえもって、彼は次のようにいう。

> 諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態——貨幣形態をもっているということだけは、だれでも、ほかのことはなにも知っていなくても、よく知っていることである。しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによっ

て同時に貨幣の謎も消え去るのである。 (62)

岩井もこの文章を『貨幣論』の「序」に引用し、次のように論評する。「ここでマルクスのいう『貨幣形態』とは、どのような商品も貨幣と直接に交換されなければ価値として実現しえないという事実のマルクス的ないいまわしである」(岩井、８ページ)。彼は著書のはじめから変なことをいっている。「どのような商品も貨幣と直接に交換されなければ価値として実現しえない」という文章を換言すると、〈どのような商品も商品と直接に交換されたのでは価値として実現しえない〉となる。すでにみてきたように、これはマルクスの見解ではない。しかも岩井は、「……という事実のマルクス的ないいまわし」だという。とすると、上の一文は、岩井自身がこの世の事実と認識していることなのか。それとも、岩井の理解によればマルクスが上掲の文章で言わんとしていることはこういうことであり、その「マルクス的いいまわし」だということなのか。次の岩井の文章は後者であることを示している。「なぜ商品は貨幣と交換されることによってしか価値を実現しえないのかという問いをみずからに発し、それにたいして、商品の価値形態の発展という弁証法的な形式のもとで答えをあたえる試み――それがマルクスのいわゆる『価値形態論』である。マルクスはそれによって『貨幣の謎』を解消すると宣言している」(同上、９ページ)。

やはり、「どのような商品も貨幣と直接に交換されなければ価値として実現しえないという事実」というのは、マルクスの文章の岩井による解釈と言い換えである。しかも誤解にもとづく換言である。既述のように、ある商品の価値形態は他の商品との交換の場面でしか現われない。しかし他方で、価値形態は歴史的変遷を経てきたその結末として、いまやすべての商品の価値は貨幣で表現される。逆の立場から見れば、貨幣はすべての商品と交換することができる。では、貨幣は価値そのもの、価値の目に見える姿かたちなのか。マルクス当時の経済学者たちもすでに、金貨や銀貨それ自体が価値であり、価値の目に見える現物形態であるとは考えていなかった。彼らの見解の代表例を岩井が29ページに引用しているが、その一例としてリカードの見解をみてみよう。「諸生産物はつねに諸生産物によって、またはサーヴィスによって、買われる。貨幣はたんに交換をおこなう媒介物にすぎない」(『経済学および課税の原理』第21章、岩井、29ページより)。彼らによれば労働こそが商品の価値の源泉なのであり、労働の産物である諸商品そのものが価値なのだ。貨幣は単なる諸商品の交換と流通の媒介物であり、交換流通の潤滑油のようなものである。

どの商品も、自らの価値とその大きさを自分自身の現物形態で表わすことができない。他方で、すべての商品は自らの価値を貨幣というある特定の種類の物で表わす。ただし、リカードらの見解によれば、諸生産物（諸商品）は本来諸生産物（諸商品）と交換されるのであって、貨幣はこれらの交換を行うための媒介物にすぎない。とすれば、ある商品の価値は本来は別のある商品によって表わされる。どのようにしてか。これが第１の問題である。

次に、いまやすべての商品はその価値をある特定の物でもって表わす。それが貨幣である。ただしそれは、その現物形態が価値そのもの、価値の目に見える姿かたちなのではない、単なる交換の媒介物にすぎない、という。他方、貨幣は人間が諸生産物の交換を始めると同時に存在したわけではない。では、商品交換世界の進展のなかで貨幣はどのようにして生成してきたのか。これが第２

の問題である。マルクスは、〈これらの問題に経済学者たちは無頓着であったが、それらをこの第３節で解明してみせよう〉というのである。

経済学者たちは貨幣の由来についても議論を重ねてきた、と岩井はいい、次のように要約している。

> 貨幣論の長い長い伝統のなかでは、相反するふたつの創世記がいい争いながら語りつがれてきた。「貨幣商品説（Commodity Theory of Money）」と「貨幣法制説（Cartal Theory of Money）」である。
>
> 一方の貨幣商品説とは、貨幣とはそれ自体が価値をもつ商品をその起源とし、ひとびとのあいだの交換活動のなかから自然発生的に一般的な等価物あるいは一般的な交換手段へと転化したという主張である。他方の貨幣法制説とは、貨幣とはそれ自体が商品としての価値をもつ必要はなく、共同体の申し合わせや皇帝や君主の勅令や市民の社会契約や国家の立法にその起源をもとめることができるという主張である。そして、このふたつの創世記のあいだの対立にはいまだに決着がついていない。（岩井、81ページ）

マルクスもこの二つの説の対立をもちろん知っていた。だからこそ彼は、「諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展」過程を、「その最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡する」ことによって、「同時に（上記のような見解の対立が続いてきた）貨幣の謎も消え去るの」だというのである。

マルクスの価値形態論

Ａ　単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

最も単純な価値関係は、明らかに、なんであろうとただ一つの異種の商品にたいするある一つの商品の価値関係である。それゆえ、二つの商品の価値関係は、一商品のための最も単純な価値表現を与えるのである。（62）

それが、「ｘ量の商品Ａ＝ｙ量の商品Ｂ　またはｘ量の商品Ａはｙ量の商品Ｂに値する。(20エレのリンネル＝１着の上着　または20エレのリンネルは１着の上着に値する。)」という価値関係である。

「すべての価値形態の秘密は、この最も単純な価値形態のうちにひそんでいる。それゆれ、この価値形態の分析には固有な困難がある」(63)、とマルクスはいう。「この（単純な）価値形態」とか「すべての価値形態」というのは、いずれもある商品のまたは諸商品の価値形態である。そして「すべての価値形態」のなかには、貨幣という価値形態すなわち貨幣形態も含まれる。ただし、諸商品のさまざまな価値形態は、やがては共通の統一的な貨幣形態へと収斂していく。換言すれば貨幣形態が生成するに至るが、それはのちの時代のことである。彼はまず、この単純な価値形態の分析から始める。課題は、一つの商品は他の商品との交換関係のなかで自らの価値の姿かたちをどの

ように表現するかである。そこで彼は、それまでの商品価値の分析でだれもが思いおよばなかった視点を導入する。ただしそれは、日々の交換のなかで商品所持者たちが自らの商品と相手の商品との間に価値の姿かたちを無意識のうちに見ているその視点である。

> ここでは、二つの異種の商品ＡとＢ、われわれの例ではリンネルと上着は、明らかに二つの違った役割を演じている。リンネルは自分の価値を上着で表わしており、上着はこの価値表現の材料として役だっている。第一の商品は能動的な、第二の商品は受動的な役割を演じている。第一の商品の価値は相対的価値として表わされる。言いかえれば、その商品は相対的価値形態にある。第二の商品は（第二の商品の価値は、ではない：丹野注）等価物として機能している。言いかえれば、その商品は等価形態にある。
>
> 相対的価値形態と等価形態とは、互いに属しあい互いに制約しあっている不可分な契機であるが、同時にまた、同じ価値表現の、互いに排除しあう、または対立する両端、すなわち両極である。この両極は、つねに、価値表現によって互いに関係させられる別々の商品のうえに分かれている。……
>
> もちろん、20エレのリンネル＝１着の上着　または、20エレのリンネルは１着の上着に値するという表現は、１着の上着＝20エレのリンネル　または１着の上着は20エレのリンネルに値するという逆関係を含んでいる。しかし、そうではあっても、上着の価値を相対的に表現するためには、この等式を逆にしなければならない。そして、そうするやいなや、上着に代わってリンネルが等価物になる。だから、同じ商品が同じ価値表現で同時に両方の形態で現われることはできないのである。この両形態はむしろ対極的に排除しあうのである。　(63)

ここで、ｘ量の商品Ａを（ｘ、Ａ）と表わそう。（ｘ、Ａ）はｘ量の商品Ａという現物そのものである。ただし、ｘ量の商品Ａはある大きさの価値でもある。とはいえ、その価値は（ｘ、Ａ）そのものから見てとることができない。だから、（ｘ、Ａ）は自分の価値を別のｙ量の商品Ｂ、（ｙ、Ｂ）で表現する。つまり、（ｘ、Ａ）の価値は別の商品でもって相対的に表現される。このようなｘ量の商品Ａの価値を、Ｖ（ｘ、Ａ）と表記することにしよう。そうすると、マルクスの上記の等式「ｘ量の商品Ａ＝ｙ量の商品Ｂ」は、（ｘ、Ａ）＝（ｙ、Ｂ）ではなく、Ｖ（ｘ、Ａ）＝（ｙ、Ｂ）となる。逆にｙ量の商品Ｂの所持者にとっては、（ｙ、Ｂ）の価値こそ関心の的なのであるが、これも相対的表現とならざるをえず、等式「ｙ量の商品Ｂ＝ｘ量の商品Ａ」は、Ｖ（ｙ、Ｂ）＝（ｘ、Ａ）となる。

等式の左辺に立つ商品はつねに相対的価値形態にあり、それは「なにか別の一商品が（自らに対して）等価形態にあるということを前提にしているのである」(63)。他方、右辺の商品は、左辺の商品の価値を自らの現物形態で表現する役割に立たされた、等価形態にある。右辺の商品は「自分の価値を表わしているのではない。それは、ただ別の商品の価値表現に材料を提供しているだけである」(63)。

次にマルクスは、「２．相対的価値形態」の「ａ　相対的価値形態の内実」のはじめに、次のよ

うにいう。

一商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちにどのようにひそんでいるかを見つけだすためには、この価値関係をさしあたりまずその量的な面からはまったく離れて考察しなければならない。人々はたいていこれとは正反対のことをやるのであって、価値関係のうちに、ただ、二つの商品種類のそれぞれの一定量が互いに等しいとされる割合だけを見ているのである。人々は、いろいろな物の大きさはそれらが同じ単位に還元されてからはじめて量的に比較されうるようになるということを見落しているのである。ただ同じ単位の諸表現としてのみ、これらの物の大きさは、同名の、したがって通約可能な大きさなのである。 (64)

「人々」とは経済学者をも指している。彼らは、「ｘ量の商品Ａ＝ｙ量の商品Ｂ　またはｘ量の商品Ａはｙ量の商品Ｂに値する」というとき、これを〈ｘ量の商品Ａの価値量とｙ量の商品Ｂの価値量は等しい〉、つまり、Ｖ（ｘ、Ａ）＝Ｖ（ｙ、Ｂ）と考えてしまっている。そして、ｘ：ｙがどんな割合のときに双方が等しくなるかというその割合だけに目を向けている。彼らとて、（ｘ、Ａ）と（ｙ、Ｂ）という二つの商品現物が同じだとは思わない。（ｘ、Ａ）≠（ｙ、Ｂ）である。双方の商品の価値すなわち投下された労働の量が、ｘ：ｙの割合のときにちょうど等しくなり、だから交換されるのだと考えている。しかし、商品体Ａを生産する労働と商品体Ｂを生産する労働は、すでに見たように互いに質の異なる有用労働であり、だからこそそれらの生産物は相異なる使用価値という形態をとって現われる。このことを無視したＶ（ｘ、Ａ）＝Ｖ（ｙ、Ｂ）という見方では、双方の価値量が等しいというだけであって、その大きさがどれほどなのかを見てとることができない。それだけでなく、どちらの商品の価値も目に見える姿かたちをとって現われない。彼らは「いろいろな物の大きさはそれらが同じ単位（同一のもの）に還元されてからはじめて量的に比較されうるようになるということを見落している」のだ。（ｘ、Ａ）を形成した有用労働とその量と、（ｙ、Ｂ）となって現われた別種の有用労働とその量とが、〈同一のもの〉に還元されてはじめて量的に比較されうるようになるのだ。彼らはこのことを見落している。にもかかわらず、彼らはそれらを無意識のうちに同一のものに還元し、同一視していた。すなわち抽象的で一般的な人間労働、姿かたちをとって現われることのない幽霊のような労働にである。そしてそれが諸商品の価値の実体である。ただし、これでは相変わらず商品の価値もその大きさも姿を現わさない。そこで、マルクスは次のようにいう。

20エレのリンネル＝１着の上着であろうと、＝20着の上着であろうと、または＝ｘ量の上着であろうと、……このような割合は、どれでもつねに、価値量としてはリンネルも上着も同じ単位（同一のもの：丹野注）の諸表現であり、同じ性質の諸物であるということを含んでいる。リンネル＝上着というのが等式の基礎である。

しかし、質的に等置された二つの商品は、同じ役割に演ずるのではない。リンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？　リンネルが自分の「等価物」または自分と「交

換されうるもの」としての上着にたいしてもつ関係によって、である。この関係のなかでは、上着は、価値の存在形態として、価値物として、認められる。なぜならば、ただこのような価値物としてのみ、上着はリンネルと同じだからである。他面では、リンネルそれ自身の価値存在が現われてくる。すなわち独立な表現を与えられる。なぜならば、ただ価値としてのみリンネルは等価物または自分と交換されうるものとしての上着に関係することができるからである。　(64)

ここで「リンネル＝上着というのが等式の基礎である。しかし、質的に等置された二つの商品は、同じ役割を演ずるのではない。リンネルの価値だけが表現される」というのは、われわれはいま、リンネルの価値は上着との交換の場面でどんな姿かたちをとって現われるか、を見ようとしているのだからである。つまり「リンネル＝上着」は、リンネルという現物と上着なる物が同じ――（リンネル）＝（上着）――ということではなく、ある「等式の基礎である」。その等式とは、V（リンネル）＝（上着）であり、〈リンネルの価値は上着である〉ということである。つまり、「この関係（私のリンネルをあなたの上着と交換する関係）のなかでは、上着は、価値の存在形態として、価値物として、認められる。なぜならば、(私にとっては）ただこのような価値物としてのみ、上着はリンネルと同じだからである」。と同時に、(私の)「リンネルそれ自身の価値存在が現われてくる。すなわち独立な表現を与えられる」。つまりリンネルの価値がリンネルという現物形態とは独立の姿かたちをとって現われる。「なぜならば、ただ価値としてのみ（私の）リンネルに等価物または自分と交換されうるものとしての（あなたの）上着に関係することができるからである」。そこでマルクスは次のように注意を促す。

われわれが、価値としては商品は人間労働の単なる凝固である、と言うならば、われわれの分析は商品を価値抽象に還元しはするが、しかし、商品にその現物形態とは違った価値形態を与えはしない。一商品の他の一商品にたいする価値関係のなかではそうではない。ここでは、その商品の価値性格が、他の一商品にたいするそれ自身の関係によって現われてくるのである。　(65)

私がリンネルを織った労働もあなたが上着を仕立てた裁縫労働も同じ人間労働であって、価値としてはいずれもこの同じ人間労働の凝固した物だというならば、われわれはこれらの有用労働の違いを捨象して、抽象的でまぼろし（幽霊）のような、姿かたちのない〈同じ人間労働〉に還元するのみである。しかし、私のリンネルがあなたの上着にたいする価値関係（交換）のなかでは、そういうことではなくて、商品リンネルの価値性格（使用価値リンネルという現物それ自体が価値でもあるのだ、ということ）が現われてくるのである。

（リンネル）≠（上着）は、(リンネルをつくる労働）≠（上着をつくる労働）だからである。他方、V（リンネル）＝V（上着)、つまり（リンネルの価値を形成する労働）＝（上着の価値を形成する労働）は、双方の有用労働の違いを捨象して、同一の抽象的人間労働に還元するだけである。そうではなく、この価値関係のなかでは、V（リンネル）＝（上着)、すなわち〈リンネルの価値を形成した労働＝上着をつくった労働〉ということが表明されるのである。なぜ、いかにして、

こんなことが可能になるのか？　それを彼は次のように説明する。それは、マルクス自身が〈なぜならば、……だからである〉と考えた彼自身の思考内容の説明ではない。リンネルを上着と交換する当の人、そしてある商品を別の商品と交換する当の人びと自身が、無意識のうちに次のように考えているのだ、ということの説明である。

> たとえば上着が価値物としてリンネルに等置されることによって、上着に含まれている労働は、リンネルに含まれている労働に等置される。ところで、たしかに、上着をつくる裁縫は、リンネルをつくる織布とは種類の違った具体的労働である。しかし、織布との等置は、裁縫を、事実上、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という共通な性格に、還元するのである。このような回り道をして、次には、織布もまた、それが価値を織るかぎりでは、それを裁縫から区別する特徴をもってはいないということ、つまり抽象的人間労働であるということが、言われているのである。ただ異種の諸商品の等価表現だけが価値形成労働の独自な性格を顕わにするのである。というのは、この等価表現は、異種の諸商品のうちにひそんでいる異種の諸労働を、実際に、それらに共通なものに、人間労働一般に、還元するのだからである。　(65)

つまり、人びとは双方の商品を形成した労働が同一のものであるがゆえに交換するのではなく、交換行為のうちに双方の有用労働を上記のような回り道をして同一のもの、同じ抽象的人間労働に還元するのだ、ということである。

> しかし、リンネルの価値をなしている労働の独自な性格を表現するだけでは、十分ではない。流動状態にある人間の労働力、すなわち人間労働は、価値を形成するが、しかし価値ではない。それは凝固状態において、対象的形態において、価値になるのである。リンネル価値を人間労働の凝固として表現するためには、それを、リンネルそのものとは物的に違っていると同時にリンネルと他の商品とに共通な「対象性」として表現しなければならない。課題はすでに解決されている。　(65-66)

リンネルの所持者は、それを他者の上着との交換という価値関係において、上記のような回り道をして自らの織布労働をリンネルの価値を形成する労働つまり抽象的人間労働に還元するのだが、価値を形成しつつあるその労働は、それが注ぎ込まれて凝固したある品物となってはじめて価値となる。しかし、リンネルは自分はそうした凝固物として価値なのだとはいえ、自分自身では自らの価値の姿を表現できない。リンネルはこうした相対的価値形態にある。リンネルが自らの価値を表現するためには、自らと違う物でありながら同様に価値である物、自分と共通の価値を形成する労働が凝固してある具体的な姿をとっている物として表現しなければならない。ここでも再び同様の回り道をして、リンネルの価値が目に見える姿として表現されるのである。リンネルは、自らの価値を表現するためには、その材料として役立ち、等価物という受動的な役割を演ずる物が、価値表現の現場に存在していなければならない。そして、その物は現に目の前に相対している。それゆえ

に、「課題はすでに解決されている」、とマルクスはいうのである。それは上着である。

> リンネルの価値関係のなかで上着がリンネルと質的に等しいもの、同じ性質のものとして認められるのは、上着が価値だからである。それだから、上着はここでは、価値がそれにおいて現われる物、または手でつかめる現物形態で価値を表わしている物として認められているのである。ところで、上着は、上着商品の身体は、たしかに一つの単なる使用価値である。上着が価値を表わしていないことは、有り合わせのリンネルの一片が価値を表わしていないのと同じことである。このことは、ただ上着がリンネルとの価値関係のなかではそのそとでよりもより多くを意味しているということを示しているだけである。ちょうど、多くの人間は金モールのついた上着のなかではそのそとでよりもより多くを意味しているように。 (66)

一般に人間の労働の産物は、一定の有用労働によって生産された諸種の使用価値である。それが本来の姿である。それらすべてが同時に価値または価値の担い手となるわけではない。ある使用価値が同時に価値の担い手ともなるのは、それが交換に付され交換の対象となるからこそなのであった。とはいえ、上記の例でのリンネルは、自らが価値であることを実証しようとするが、自分自身では自らの価値の姿を示すことができない。自分自身の姿はリンネルという使用価値を示すだけである。だからリンネルは価値として上着に相対するなかで、上着を自分と同質のものすなわち価値なのだとし、上着という手でつかめる現物形態そのままで価値を表わしている物という役割を負わせる。とはいえ、リンネルが自分自身では価値であることを表現できず、一つの単なる使用価値であるのと同様に、上着そのものも一つの使用価値であるにすぎない。上着もまた単独ではけっして価値の姿を表わしえないのであって、相対的価値形態にあるリンネルとの価値関係のなかでのみ、等価形態にある等価物として自分自身の姿かたちより以上のことを意味することになる。

> すでに見たように、一商品Ａ（リンネル）は、その価値を異種の一商品Ｂ（上着）の使用価値で表わすことによって、商品Ｂそのものに、一つの独特な価値形態、等価物という価値形態を押しつける。リンネル商品はそれ自身の価値存在を顕わにしてくるのであるが、それは、上着がその物体形態とは違った価値形態をとることなしにリンネル商品に等しいとされることによってである。だから、リンネルは実際にそれ自身の価値存在を、上着が直接にリンネルと交換されうるものだということによって、表現するのである。 (70)

相対的価値形態にあるリンネルの価値量は、その生産に社会的に必要な労働時間によって、しかも抽象的な人間労働という幽霊のようなものに還元された労働の量によって規定される。それはリンネル自身では表現不可能なものである。商品リンネルはこのような自分自身の価値存在を、上着が直接にリンネルと交換されうるものだということによって表現する。等価物という価値形態を押しつけられた上着は、それ自身の価値を表わしているのではない。上着という現物形態そのままで商品リンネルの価値表現の材料となる。だからＶ（リンネル）＝（上着）なのである。等価物とし

てのｙ量の上着は、ｘエレのリンネルの価値量を表現することはできるが、「しかしそれはそれ自身の価値量、上着の価値量を表現することはけっしてできないのである。価値等式における等価物は、つねに、ただ、ある物の、ある使用価値の、単純な量の形態をもっているだけだというこの事実」(70)、つまり、Ｖ（ｘエレのリンネル）＝（ｙ量の上着）という事実である。「この事実の皮相な理解は、ベーリをもその多くの先行者や後続者をも惑わして、価値表現のうちに単なる量的な関係を見るに至らせたのである」(同上)。つまり、Ｖ（ｘエレのリンネル）＝Ｖ（ｙ着の上着）という誤解である。

> そうではなく、一商品の等価形態はけっして量的な価値規定を含んではいないのである。
> 等価形態の考察にさいして目につく第一の特色は、使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になるということである。 (70)

この社会の人びとは、自分の品物を相手の別の品物と交換する。しかもそれは、自分の品物と同等のものと判断すればこそである。相手もまた同様である。この〈同等のもの〉が双方の商品の価値とその量である。彼らは互いに、自分の商品の価値の姿かたちを、相手の商品の現物形態のうちに見出すのだ。ただし、マルクスはここで注意を促す。

> 商品の現物形態が価値形態になるのである。だが、よく注意せよ。この取り替え（quidproquo）が一商品Ｂ（上着や小麦や鉄など）にとって起きるのは、ただ任意の他の一商品Ａ（リンネルなど）が商品Ｂにたいしてとる価値関係のなかだけでのことであり、ただこの関係のなかだけでのことである。どんな商品も、等価物としての自分自身に関係することはできないのであり、したがってまた、自分自身の現物の皮を自分自身の価値の表現にすることはできないのだから、商品は他の商品を等価物としてそれに関係しなければならないのである。すなわち、他の商品の現物の皮を自分自身の価値形態にしなければならないのである。 (71)

一商品の現物（ｘ、Ａ）は、自分の価値Ｖ（ｘ、Ａ）を自分の生ま身では表現できない。だから（ｘ、Ａ）は自分のＶ（ｘ、Ａ）を表現するためには他の商品（ｙ、Ｂ）を等価物にしたてて、それと関係する。Ｖ（ｘ、Ａ）＝（ｙ、Ｂ）である。等価形態にある（ｙ、Ｂ）は、それ自身の生ま身としては単に使用価値（ｙ、Ｂ）であって、他の商品と同様に自分の生ま身で自分の価値Ｖ（ｙ、Ｂ）を表わすことはできない。しかし、交換の場面では、（ｙ、Ｂ）は相手の商品の価値Ｖ（ｘ、Ａ）の鏡となるのである。「商品の現物形態が価値形態になるのである」。そこで（ｘ、Ａ）の所持者はそれを（ｙ、Ｂ）と交換する。ただし、こうした妙なこと、一商品の現物が他の商品の価値の鏡となることは、この交換の場面に直面しているかぎりにおいて起きることであって、交換が成立したとたんに、それは新たな持ち主にとってもはやもとの所有物（ｘ、Ａ）の価値の鏡ではなく、まさに使用価値（ｙ、Ｂ）そのものである。同様のことが、（ｘ、Ａ）の所持者と同様に相手の（ｙ、Ｂ）の所持者にとっても起きる。

「このことをわかりやすくする」ために、マルクスは種類の異なる二つの品物ＡとＢの重量を計る際の尺度という例をあげる。天秤の左の皿に（ｘ、Ａ）を乗せ、右の皿のＢの量を調整していき、（ｙ、Ｂ）のときにちょうど釣合ったとする。それぞれの重量をWとすると、Ｗ（ｘ、Ａ）＝W（ｙ、Ｂ）である。しかしこれでは、双方の品物の重量は等しいということだけで、重量の大きさそのものはわからない。そこでこのような場合には、右の皿には重量が既知の物体、つまりさまざまな重量の分銅を乗せて左の皿の品物（ｘ、Ａ）の重量を計る。それぞれの分銅は銅という物体ではあるが、それらはここでは、１、10、100（g、kg、mg）といった重量以外のなにものをも表わしていない物体とみなされ、左の皿の品物に対して重量の尺度となり、重量の現象形態という役割を演じる。この例と同様に、「われわれの価値表現では上着体はリンネルに対してただ価値だけを代表しているのである」(71)。

「とはいえ、類似はここまでである」。銅は（ｘ、Ａ）の重量表現では、「両方の物体に共通な自然属性、それらの重さを代表している――、ところが、上着は、リンネルの価値表現では、両方の物の超自然的な属性、すなわちそれらの価値、純粋に社会的な或るものを代表しているのである」(71)。

すなわち、既述のようにＶ（20エレのリンネル）＝（１着の上着)、Ｖ（ｘ、Ａ）＝（ｙ、Ｂ）である。一方の商品の価値とその大きさが、他方の商品の使用価値（現物形態）とその量で表わされる。ただし上述のように、こうしたことは双方の商品の交換という価値関係のなかでだけ起きることである。重量天秤の例では、左の皿の20エレのリンネルは自分の重量を自分自身で表現することができないので、重量の現象形態であり重量尺度の役を演じる右の皿の分銅との関係のなかで、重量を表現する。Ｗ（20エレのリンネル）＝（ｘgの分銅）である。同様に、リンネルは自分がある大きさの価値であることを自分自身では表現できない、つまり相対的価値形態にあるので、それを表現するためには他の商品との価値関係のなかに立たなければならない。「等価形態については逆である。等価形態は、ある商品体、たとえば上着が、このあるがままの姿の物が、価値を表現しており、したがって生まれながらにして価値形態をもっているということ、まさにこのことによって成り立っている」(72)。それは重量天秤における分銅が、現物の姿のままで重量を表現し、生まれながらにして重量そのものの形態となっているようなものである。相対的重量形態にある一つの物体に対する等重量形態としての分銅の重量は、この関係から生ずるのではなく、この関係のなかでは天秤の釣合いという形で実証されるだけである。分銅のもつ重さは自然の属性だからである。これと同様に、等価形態にある上着は、現物の姿のままで価値を表現する役割を演じる。「上着もまた、その等価形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか保温に役立つとかいう属性と同様に、生まれながらにもっているように見える」(同上)。ただし、これは「ただしリンネル商品が等価物としての上着商品に関係している価値関係のなかで」(同上）そのように見えるだけである。交換場面から一歩外に出たとたん、上着はどう見ても上着という現物そのままの姿にもどっている。上着の価値もその他の諸商品の価値なるものも、それらがもつ自然の属性ではなく超自然的な、それらを交換し合う人びとがそれらに担わせた社会的な属性だからである。

これまで見てきたように、マルクスは「20エレのリンネル＝１着の上着」という最も単純な価値

表現、すなわちＶ（ｘ、Ａ）＝（ｙ、Ｂ）の分析をとおして、

> 等価形態の考察にさいして目につく第一の特色は、使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になるということである。 (70)

と指摘していた。これ以上のマルクスの分析過程を示す引用は省略するが、彼は等価状態の第二、第三の特色を次のように指摘する。

> だから、具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になるということは、等価形態の第二の特色なのである。 (73)

> だから、私的労働がその反対物の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になるということは、等価形態の第三の特色である。 (73)

つまり、この社会における富の基本的形態であるもろもろの商品、すなわち交換の対象であり交換を目的とした労働生産物は、具体的な諸使用価値であると同時にある大きさの価値でもあるのだが、ある商品に内在する価値なるものは、この社会においては別の商品の使用価値という現象形態をとり、商品の価値の実体であるまぼろしのような対象性すなわち抽象的人間労働なるものは、別の商品の使用価値を生産する具体的有用労働という姿かたち（現象形態）をとって現われる。そして商品を生産する個々人の私的労働は、当の商品の価値が別の商品の使用価値という現象形態をとることをとおして、交換相手の商品の使用価値を生産する具体的有用労働、生産者自身にとっての使用価値ではなく他人にとっての使用価値でありかつ他人にとっての有用労働、すなわち直接に社会的な形態にある労働という姿をとって現われるのである。

以上が、「20エレのリンネル＝１着の上着」という最も単純な価値形態をマルクスが徹底分析して解明したことがらである。彼はまえもって読者に、「すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる」(63) と注意をうながしていた。この最も単純な価値形態のうちに、「光まばゆい貨幣形態に至るまで」(63) の「すべての価値形態の秘密」がひそんでおり、「それゆえ、この価値形態の分析には固有な困難がある」からであった。彼は単純な価値形態について以上の分析を終えたのちに、それを次のように要約している。

> 商品Ｂにたいする価値関係に含まれている商品Ａの価値表現のいっそう詳しい考察は、この価値関係のなかでは商品Ａの現物形態はただ使用価値の姿として、商品Ｂの現物形態はただ価値形態または価値の姿としてのみ認められているということを示した。つまり、商品のうちに包み込まれている使用価値と価値との内的な対立は、一つの外的な対立によって、すなわち二つの商品の関係によって表わされるのであるが、この関係のなかでは、自分の価値が表現されるべき一方の商品は直接にはただ使用価値として認められるのであり、これにたいして、それ

で価値が表現される他方の商品は直接にはただ交換価値として認められるのである。つまり、一商品の単純な価値形態は、その商品に含まれている使用価値と価値との対立の単純な現象形態なのである。 (75-76)

B　全体的な、または展開された価値形態

労働生産物が相互に商品として交換される社会には、生産者としての個人や家族や職場などが多数存在する。それらをP1、P2、P3、……Pnとしよう。それぞれのPは私的労働を営み、商品A、B、C、……、Nを生産する。上述の単純な価値形態V（x、A）＝（y、B）は、商品Aの所持者P1がそれをP2の所持する商品Bと交換するというケースであった。P2の立場から見ればこれはV（y、B）＝（x、A）となる。ところで、P1の生活には自らの生産物Aと、それとの交換によって入手した有用物Bのみではなく、もっとさまざまな品物が必要である。P1はそれらも自らの商品Aとの交換によって入手しなければならない。「つまり、商品Aが他のどんな商品種類にたいして価値関係にはいるかにしたがって、同じ一つの商品のいろいろな単純な価値表現が生ずるのである。商品Aの可能な価値表現の数は、ただ商品Aとは違った商品種類の数によって制限されているだけである」(76)。これが「第３節」の「B」の価値形態である。

20エレのリンネル＝１着の上着　または＝10ポンドの茶　または＝40ポンドのコーヒー　または＝１クォーターの小麦　または＝２オンスの金　または1/2トンの鉄　または＝その他 (77)

Ｐ１が自分の生産した商品Aをさまざまな商品と交換すると同様に、どの商品生産者も自分の商品を他の種々の商品と交換する。だから、任意のPiにとって自分のｉ量の商品Ｉの価値表現は次のようになる。

V（i、I）＝（a、A）or＝（b、B）or＝（c、C）……or＝（h、H）or＝（j、J）……or＝（n、N）

これと同様の式は、Ｐの数または商品種類の数だけありうる。そして、商品種類が増えるほどこの式の数も増えるし、式の右辺に立つ商品種類も増える。ただしどの式においても、式の左辺に立つ商品は同じ式の右辺に立つことはありえない。どのＰも、自分の商品を同じ商品と交換することはないからである。このような商品交換が拡大した状況について、マルクスは下のようにいう。

ある一つの商品、たとえばリンネルの価値は、いまでは商品世界の無数の他の要素で表現される。他の商品体はどれでもリンネル価値の鏡になる。こうして、この価値そのものが、はじめてほんとうに、無差別な人間労働の凝固として現われる。なぜならば、このリンネル価値を形成する労働は、いまや明瞭に、他のどの人間労働でもそれに等しいとされる労働として表わされているからである。それゆえ、いまではリンネルはその価値形態によって、ただ一つの他の商品種類にたいしてだけではなく、商品世界にたいして社会的な関係に立つのである。商品として、リンネルはこの世界の市民である。同時に商品価値の諸表現の無限の列のうちに、商

品価値はそれが現われる使用価値の特殊な形態には無関係だということが示されているのである。

第一の形態、20エレのリンネル＝１着の上着　では、これら二つの商品が一定の量的な割合で交換されうるということは、偶然的事実でありうる。これに反して、第二の形態では、偶然的現象とは本質的に違っていてそれを規定している背景が、すぐに現われてくる。リンネルの価値は、上着やコーヒーや鉄など無数の違った所持者のものである無数の違った商品のどれで表わされようと、つねに同じ大きさのものである。二人の個人的商品所持者の偶然的な関係はなくなる。交換が商品の価値量を規制するのではなく、逆に商品の価値量が商品の交換割合を規制するのだ、ということが明らかになる。　(77-78)

ところで、Ｐiが自分の商品Ｉを、他のＰたちの商品Ａ～Ｎ（ただしＩを除く）と交換することは、逆から見れば、Ｐ1～Ｐnたちがそれぞれの商品Ａ～ＮをＰiの商品Ｉと交換することでもある。つまり、

Ｖ（i、I）＝（a、A）or＝（b、B）or＝（c、C）……＝（n、N）　――(1)

は逆の立場から見れば、

Ｖ（a、A）orＶ（b、B）orＶ（c、C）……orＶ（n、N）＝（i、I）　――(2)

ということでもある。ただし、左辺の諸商品の所持者たちは、それぞれが自分の商品を式(1)のように他のさまざまな商品と交換するのであって、右辺の商品Ｉはそのなかの一つにすぎない。だから、式(2)は、商品Ａ～Ｎの所持者たちが共同して自分たちの商品の価値をそれらと異なるある特定種類の商品で表現する、ということではけっしてない。マルクスは次のようにいう。

形態Ⅱでも、やはりただ一つ一つの商品種類がそれぞれの相対的価値形態を総体的に展開しうるだけである。言いかえれば、すべての他の商品がその商品種類にたいして等価形態にあるからこそ、またそのかぎりでのみ、その商品種類自身が、展開された相対的価値形態をもつのである。ここではもはや価値等式――たとえば20エレのリンネル＝１着の上着　または＝10ポンドの茶　または＝１クォーターの小麦、等々――の二つの辺をおきかえることは、(20エレのリンネル＝１着の上着　の両辺をおきかえるのとは違って、丹野注）この等式の全性格を変えてこれを全体的価値形態から一般的価値形態に転化させることなしには、不可能である。

このあとのほうの形態、すなわち形態Ⅲが最後に商品世界に一般的な相対的価値形態を与えるのであるが、それは、ただ一つの例外を除いて、商品世界に属する全商品が一般的等価形態から排除されているからであり、またそのかぎりでのことである。したがって、一商品、リンネルが他のすべての商品との直接的交換可能性の形態または直接的に社会的な形態にあるのは、他のすべての商品がこの形態をとっていないからであり、またそのかぎりでのことなのである。(82)

そしてこの「形態Ⅲ」が、下記の形態である。

C　一般的価値形態

$$\left.\begin{array}{ll}\text{１着の上着} & = \\ \text{10ポンドの茶} & = \\ \text{40ポンドのコーヒー} & = \\ \text{１クォーターの小麦} & = \\ \text{２オンスの金} & = \\ \text{１／２トンの鉄} & = \\ \text{ｘ量の商品A} & = \\ \text{等々の商品} & =\end{array}\right\}\ \text{20エレのリンネル}\qquad \left\{\begin{array}{l}\text{われわれの表記法では}\\ \left.\begin{array}{l}\text{V（a、A）＝}\\ \text{V（b、B）＝}\\ \text{V（c、C）＝}\\ \vdots\\ \text{V（n、N）＝}\end{array}\right\}\text{（i、I）——（3）}\end{array}\right\}$$

いろいろな商品はそれぞれの価値をここでは（一）単純に表わしている、というのは、ただ一つの商品で表わしているからであり、そして（二）統一的に表わしている、というのは、同じ商品で表わしているからである。諸商品の価値形態は単純で共通であり、したがって一般的である。 (79)

つまり、どの商品も自分たちの価値をある特定の商品でもって共通にしかも統一的に表現するに至ってはじめて、式（３）は式（１）の逆関係である式（２）とはまったく異なる新たな段階になる。式（３）の右辺の商品Ｉは、もはや任意の商品ではなく、他の諸商品（の所持者たち）が一致してその特別な役割を付与したある特定の商品である。逆にいえば、この商品以外のすべての商品はこの市場では式（３）の左辺に立つことになり、新たに商品世界に参入するどの商品も同様である。再び逆にいえば、すべての商品たちは、この市場ではこの特定の商品Ｉが自分たちとともに式の左辺に立つことを許さず、式の右辺にこのＩのみを固定するのである。このようにして、すべての商品の価値形態が共通でかつ統一的な一般的形態をとることになる。

それでは、他の商品たちとともに相対的価値形態に立つことを拒絶され、すべての商品の一般的等価形態の役割を一身に演じることになったこの商品Ｉは、自分自身の価値をどうやって表現することになるのか。それはまさに、

V（i、I）＝（a、A）and＝（b、B）and＝（c、C）……and＝（n、N）and etc

である。商品Ｉの価値は、自分以外のすべての商品現物でもって表現されるのである。つまり、この市場では商品Ｊの所持者はまずそれをＶ（ｊ、Ｊ）＝（ｉ、Ｉ）としてこの特定の商品Ｉと交換し、そののちに自分の欲する商品Ｋの所持者とＶ（ｉ、Ｉ）＝（ｋ、Ｋ）としてＩをＫと交換する。これは商品Ｋの所持者にとってみれば、やはりまずは自分の商品の価値をＶ（ｋ、Ｋ）＝（ｉ、Ｉ）として表現することである。とはいえ、商品Ｉがこうした一般的等価形態に立つのは、商品Ｉの生ま身が価値そのものの現物形態であるからではけっしてない。商品Ｉといえどもその価値を自分自身で表現することができないのは、相変らず他の諸商品と同様である。まさにＩ以外のすべての商品（の所持者たち）が共同で社会的に、商品Ｉに特別の役割を負わせるのである。

新たに得られた形態は、商品世界の価値を、商品世界から分離された一つの同じ商品種類、たとえばリンネル（上の例では商品Ｉ、丹野）で表現し、こうして、すべての商品の価値を、その商品とリンネルとの同等性によって表わす。リンネルと等しいものとして、どの商品の価値も、いまではその商品自身の使用価値から区別されるだけではなく、いっさいの使用価値から区別され、まさにこのことによって、その商品とすべての商品とに共通なものとして表現されるのである。それだからこそ、この形態がはじめて現実に諸商品を互いに価値として関係させるのであり、言いかえれば諸商品を互いに交換価値として現われさせるのである。

前のほうの二つの形態は、商品の価値を、ただ一つの異種の商品によってであれ、その商品とは別の一連の多数の商品によってであれ、一商品ごとに表現する。どちらの場合にも、自分に一つの価値形態を与えることは、いわば個別商品の私事であって、個別商品は他の諸商品の助力なしにこれをなしとげるのである。他の諸商品は、その商品にたいして、等価物という単に受動的な役割を演ずる。これに反して、一般的価値形態は、ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立する。一つの商品が一般的価値表現を得るのは、同時に他のすべての商品が自分たちの価値を同じ等価物で表現するからにほかならない。そして、新たに現われるどの商品種類もこれにならわなければならない。こうして、諸商品の価値対象性は、それがこれらの物の純粋に「社会的な定在」であるからこそ、ただ諸商品の全面的な社会的関係によってのみ表現されうるのであり、したがって諸商品の価値形態は社会的に認められた形態でなければならないということが、明瞭に現われてくるのである。 (80-81)

マルクスは、以上のような一般的価値形態から貨幣形態への移行を、以下のように説明する。

一般的等価形態は価値一般の一つの形態である。だから、それはどの商品にでも付着することができる。他方、ある商品が一般的等価形態（形態Ⅲ）にあるのは、ただ、それが他のすべての商品によって等価物として排除されるからであり、また排除されるかぎりでのことである。そして、この排除が最終的に一つの独自な商品種類に限定された時間から、はじめて商品世界の統一的な相対的価値形態は客観的な固定性と一般的な社会的妥当性をかちえたのである。 (83)

ある特定の商品Ｉが一般的等価形態にあるのは、それが他のすべての商品によって等価物として排除されるからであり、しかも排除されるかぎりのことであるから、基本的には、どの商品でも可能性としては一般的等価物となりうる。ただしすべての商品がそれを一致協力して排除し、特別扱いするそのかぎりでのことである。だから、ある時代のある地域では商品Mが一般的等価物となっており、別の地域では別の商品Nがその役を演じている、といったことが生じる。ただしこのような状況は、商品交換世界に参加する商品の種類と量が多くなり、個別の商品世界がより大きく統合され、より大きな商品交換世界がより広い地域を被っていくにつれて、一般的等価物の役を演ずる商品もまた収斂していく。そして「この排除が最終的に一つの独自の商品種類に限定された瞬間か

ら」、それはその社会の貨幣となる。マルクスは上掲の文章に続けて次のようにいう。

> そこで、その現物形態に等価形態が社会的に合生する特殊な商品種類は、貨幣商品になる。言いかえれば、貨幣として機能する。商品世界のなかで一般的等価物の役割を演ずるということが、その商品の独自な社会的機能となり、したがってまたその商品の社会的独占となる。このような特権的な地位を、形態Ⅱではリンネルの特殊的等価物の役を演じ形態Ⅲでは自分たちの相対的地位を共通にリンネルで表現しているいろいろな商品のなかで、ある一定の商品が歴史的にかちとった。すなわち、金である。 (83-84)

人びとが互いの労働生産物を交換し合う社会も、それなりに長い歴史をもつ。時代によりまた地域によって、さまざまな種類の品物がそれぞれの社会で一般的等価物の役割を演じていた。つまりそれぞれの社会ごとに当の社会の貨幣が存在した。そして、歴史上の事実として、金や銀が大規模交易世界の貨幣という地位を獲得した。しかしその金銀といえども、それ自体が価値の現物形態なのではない。過去に一般的等価物の役を演じていた他の商品と同様に、商品世界の一員であった。「一般的価値形態は、ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立する。一つの商品が一般的価値表現を得るのは、同時に他のすべての商品が自分たちの価値を同じ等価物で表現するからに他ならない。……こうして、諸商品の価値対象性は、それがこれらの物の純粋に『社会的な定在』であるからこそ、ただ諸商品の全面的な社会関係によってのみ表現されうるのであり、したがって諸商品の価値形態は社会的に認められた形態でなければならないということが、明瞭に現われてくるのである」(80-81)。そして、「商品世界のなかで一般的等価物の役割を演ずるということが、その商品の独自な社会的機能となり、したがってまたその商品の社会的独占となる。このような特権的な地位を」(83-84)、歴史上で最終的にかちとった商品が、金銀なのである。マルクスは「第３節　価値形態または交換価値」のはじめの部分で、次のように宣言していた。

> いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目だたない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである。 (62)

そして、「Ａ　単純な……価値形態」すなわち「20エレのリンネル＝１着の上着」における等価形態の分析のところで、彼は次のように経済学者を揶揄していた。

> しかし、ある物の諸属性は、その物の他の物にたいする関係から生ずるのではなく、むしろこのような関係のなかではただ実証されるだけなのだから、上着もまた、その等価形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか保温に役だつとかいう属性と同様に、生まれながらにもっているように見える。それだからこそ、等価形態の不可解さが感ぜられるので

あるが、この不可解さは、この形態が完成されて貨幣となって経済学者の前に現われるとき、はじめて彼のブルジョア的に粗雑な目を驚かせるのである。そのとき、彼はなんとかして金銀の神秘的な性格を説明しようとして、金銀の代わりにもっとまぶしくないいろいろな商品を持ち出し、かつて商品等価物の役割を演じたことのあるいっさいの商品賤民の目録を繰り返しこみあげてくる満足をもって読みあげるのである。彼は、20エレのリンネル＝１着の上着　というような最も単純な価値表現がすでに等価形態の謎を解かせるものだとうことには、気がつかないのである。　(72)

彼ら経済学者たちは、世界各地でかつて商品等価物の役割を演じたことのあるさまざまな品物、いわゆる原始貨幣の数かずをリストアップし、そのうえで、すでに見たようにリカードは「貨幣はたんに交換をおこなう媒介物にすぎない」とみなしていた。同様に岩井の『貨幣論』によれば、ヒュームとスミスは以下のように述べていた。

実を言うと、貨幣は流通において主題の一つとなりうるものではなく、財貨の交換を円滑にするためにひとびとがたがいに同意しあった交換用具にすぎない。貨幣は商品流通の車輪の一つなどではけっしてない。そうでなく、それら車輪の回転を円滑にするための潤滑油のようなものである。　(デーヴィッド・ヒューム「貨幣について」『市民の国について』所収、岩波文庫)――(岩井、29ページから再引用)

富は貨幣すなわち金と銀からなるのではなくて、貨幣で買えるものからなり、貨幣はものを買う力があるからこそ価値があるということを、まじめに証明しようとするのは、あまりにも馬鹿げている。　(『国富論』第四篇第一章)――(岩井、31ページから再引用)

岩井はこのスミスからの引用に続けて、「と、(スミスが) つよく断言するとき、われわれはそこに表象と実体をとりちがえている重金主義者の呪物崇拝にたいする、いかにも啓蒙主義者らしい嘲笑を聞きとることができるはずである。そして、この嘲笑は、ヒュームもリカードもまちがいなく共有していたものなのである」(31ページ)、と解説している。

ただし岩井は、以上のようなマルクスの価値形態論について、次のように批判する。「『資本論』の読み手の多くは、ここに循環論法のにおいをかぎつける。労働価値論を前提して商品世界の貨幣形態をみちびきだし、商品世界の貨幣形態をとおして労働価値論を実証するという循環論法である。たしかに、過去に何人ものひとが、なんとかこの循環論法をつかわずに価値形態論を再構築することをこころみてきた。だが、護教的なマルクス主義者をのぞく大多数の読み手は、この循環論法に絶望して、労働価値論も価値形態論も捨てさってしまったのである」(岩井、42ページ)。護教的マルクス主義者であれアンチマルクス主義者であれ、『資本論』第１章「商品」の各節でマルクスが展開した分析と検討を誤読すれば、つまりマルクスは「労働価値論者」なのだと最初から誤解してかかってこれを読み進めば、そこに循環論法にかぎらずさまざまな奇妙な論法のにおいをかぎつけ

るであろう。その実例は多数あるはずである。人はたいてい自分の読みたいように読み、そして自分が誤読した結果を著者自身が確かにこのように書いている、と著者にその責任を負わせるものだからである。岩井は上の引用文に続けて次のようにいう。

> しかしながら、「循環論法」それ自体はかならずしも絶望すべきものではない。いや、これからわたしが示していこうとおもうのは、「貨幣形態」にもし「秘密」があるとしたら、それはこの貨幣形態を固有の価値形態とする商品世界がまさに「循環論法」によって存立する構造をしているということなのである。それは同時に、貨幣という存在が、商品世界におけるまさに「生きられた循環論法」にほかならないということを示すことにもなるのである。
>
> (岩井、42ページ)

労働生産物は、それらが人びとの間で互いに交換され、また交換することを目的として生産されるような社会でこそ、商品となる。そしてそのような社会でこそ、労働生産物は使用価値であると同時に、価値の担い手になる。使用価値はどんな社会においても現物自体として有用な物であり、使用価値は労働生産物それ自体のもつ自然的諸属性に基づいている。それに対して商品の価値は、労働の産物を交換しあう社会の人びとが、それらに担わせた超自然的なつまり社会的な属性である。このことをマルクスは「第４節」では次のように要約して説明している。

> それでは、労働生産物が商品形態をとるとき、その謎のような性格はどこから生ずるのか？明らかにこの形態そのものからである。(商品交換社会では、丹野) いろいろな人間労働の同等性はいろいろな労働生産物の同等な価値対象性という物質形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の尺度は労働生産物の価値量という形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働の前述の社会的規定がそのなかで実証されるところの彼らの諸関係は、いろいろな労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。
>
> だから、商品形態の秘密はただ単に次のことにあるわけである。すなわち、商品形態は人間に対して人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも彼らの外に存在する社会的関係として反映させるということである。このような置き替え［Quidproquo］によって、労働生産物は商品になり、感覚的であると同時に超感覚的である物、または社会的な物になるのである。 (86)

おわりに

商品の顕微解剖的分析におけるマルクスの緻密な論理展開を、私は岩井の解釈を反面教師としながらこれまで追跡してきた。ここまでくれば、このあとの岩井の循環論法貨幣論にまで付き合う必要はないであろう。『資本論』第１章「商品」には、さらに「第４節　商品の呪物的性格とその秘

密」が続く。ここでもさらに緻密な検討と分析が展開されている。しかし、第１節から第３節までの彼の論理展開を迷い子にならずに追跡できれば、第４節で道に迷うことはもうないであろう。

ここで再び「ヴァグナーの著者への傍注」にもどってみよう。

> 商品の「価値」は、他のすべての歴史的社会形態にも、別の形態でではあるが同様に存在するもの、すなわち労働の社会的性格――労働が「社会的」労働力の支出として存在するかぎりでの――を、ただ歴史的に発展した一形態で表現するだけだ。　(全集19巻所収、375ページ)

彼は上述のような価値形態の分析によって、いつの時代のどんな社会をも貫いている「自然法則」が、他の社会とは違った現象形態をとってではあるがこの商品生産社会・資本主義社会をも貫いていることを明確に示したのである。

マルクスが「……への傍注」のなかで以下のように述べている部分は、上述のことを念頭においての文章であると考えられる。

> 他方では、この暗い人は、私の場合にはすでに商品の分析において、商品が現れる二重の仕方にとどまらないで、ただちにそのさきへすすんで次のことを示しているということを見のがしている。すなわち、商品のこの二重存在のうちに、この商品をその生産物とする労働の二重の性格が、つまり有用労働、すなわち使用価値をつくる具体的な労働様式、および抽象的労働、どんな「有用な」仕方で支出されるかにかかわらない労働力の支出としての労働という二重の性格が表示されるということ（のちの生産過程の叙述はそれを基礎としている）、商品の価値形態の、最終的にはその貨幣形態の、それゆえに貨幣の発展においては、ある商品の価値が他の商品の使用価値に、すなわち他の商品の現物形態に表示されるということ、剰余価値そのものは労働力の「特殊的な」、もっぱらそれだけにそなわっている使用価値から引きだされるということ、等々、それゆえ私にあっては使用価値はいままでの経済学におけるのとはまったく違った仕方で重要な役割を演じていること、しかし注意すべきことだが［nota bene］、使用価値が考察されるのは、その考察が、「使用価値」と「価値」の概念または語についてあれこれと理屈をこねることからではなく、あたえられた経済的形象の分析から生まれてくる場合につねに限られているということ、以上である。
>
> (アードルフ・ヴァグナー著『経済学教科書』への傍注：全集第19巻、(370-71)、下線は丹野による)

マルクスは、彼以前から彼と同時代までの経済学者たちの商品の価値その他についての考察を微に入り細にわたって批判的に分析しながら、そのつど何回も原稿を書き改めたようである。そして『資本論』初版の第１章第１節「商品」の叙述として結晶したのである。彼は第２版ではその部分を全面的に書き改め、第２版での第１章「商品」としたのであるが、内容は基本的に違わないと「第２版後記」で（言外に）いっている。ただ、第２版の「第一章第一節では、それぞれの交換価

値が表現される諸等式の分析による価値の導出が、科学的にいっそう厳密になされている。また、第一版ではただ暗示されているだけの、価値実体と社会的必要労働時間による価値量の規定との関連も、明確に述べてある。第一章第三節（価値形態）は全部書きかえたが、これはすでに第一版の二重の記述から見ても必要なことだった」、と彼は「第二版後記」(18) で記している。

それゆえに、彼は第２版でいえば第２章以下、さらにその後の第２編以下の諸章を、上掲の引用文の観点に立って、とくに私が下線を付した観点に立って、緻密な分析とその論理展開を堂々とした自負心をもって叙述することができたのである。このことは、「第２版後記」で第１章と第３章第１節、および第７章の特に第２節を書き直した以外は文体に関する書き改めだけであるとことわっていることにうかがえる。彼は上に引用した「傍注」のなかの文章が端的に示すような観点・立脚点を、晩年に至るまでゆるぎなくもちつづけたのである。

ところが、一例としてあげれば、フランスのマルクス研究者ジャック・ビデは次のようにいっている。

> 『資本論』［第一巻］第一章の第三節および第四節をめぐって生み出された膨大な文献は、結果的には失望をもたらしたように思われる。問題は単純ではないと言うべきである。なぜなら、マルクスによって幾度となく書き直されたこの節は、おそらくまた最も未完成な節でもある。まちまちな解釈を生み出しうる相互に不調和な諸言明が共存しているということが、その未完性さを証言している。
>
> （ビデ著、今村ほか訳、『資本論をどう読むか』、法政大学出版局、1989、306ページ）

このような解釈は、多くの研究者の間にかなり一般的な見解でもあろう。しかし、私は第一節と第二節も含めて第一章全体が「未完成」だとは思わない。本稿は、それは完成したものである、ということを示しているはずである。あちらこちらに前後で矛盾する「相互に不調和な諸言明が共存している」ように見えるのは、そのすべてがマルクス自身の考えであり彼自身の思考の叙述だと読んでしまうからである。だからこそ、ビデも含め多くの研究者によって「まちまちな解釈」が生み出されるのである。そうではなく、マルクスはスミスやリカードその他の経済学者たち（の叙述・思考）と対話をしながら、書き進めているのである。このマルクス独特の“対話法”（弁証法）を読み誤るから、「相互に不調和な諸言明が共存している」不可解な論述に見えるのだ。本稿は、岩井の『貨幣論』をこうした読解（誤読）の具体例として取り上げながら、マルクスが『資本論』の第１章で展開している論理の追跡を試みたものである。